翻訳

アダム・スミス『道徳感情論』第Ⅵ部「美徳ある人柄について」

山本陽一（訳）

訳者はしがき

以下は出版社と編者の承諾を得て Adam Smith (2002) *The Theory of Moral Sentiments*, Knud Haakonssen (ed.), Cambridge University Press, pp. 248-312 を翻訳したものである。

本書全体の邦訳については、米林富男訳『道徳情操論』（一九六九年、未来社）、水田洋訳『道徳感情論』（二〇〇三年、岩波書店）を参照してほしい。本稿も上の先行業績に多くを負う。村井章子・北川知子訳『道徳感情論』（二〇一四年、日経ＢＰ）も参照した。

翻訳にあたり、原文にないが、訳者が本文に付加した諸点について。①各パラグラフに改行はないが、適宜これをほどこした。②引用符号「　」に相当するものは原文にないが、文意を明確にするため使用した。〈や――〉についても同様である。③［　］内の語句は訳者の挿入である。

脚注について。アラビア数字は編者の、アルファベットはスミス自身の注を示す。

本書のタイトルと第Ⅵ部の目次は以下のとおり。

『道徳諸感情についての理論。あるいは、人間が、まずは隣人のふるまいと人柄について、そのあとわが身のふるまいと人柄について、自然に下す判断の基底にある諸原理を分析する一論考』

第Ⅵ部　美徳ある人柄について。三つのセクションから構成
序論
セクションⅠ　本人自身の幸福に影響するものとしての個人の人柄、すなわち、目先が利いて注意深い資質［予見注意力］について
セクションⅡ　他人の幸福に影響しうるものとしての個人の人柄について
序論
第一章　自然がおこなう勧告によれば、各種個人はどんな順序でわたしたちから世話をされ、気づかわれるのかについて
第二章　自然がおこなう勧告によれば、各種の社会集団はどんな順序でわたしたちから恵み深くされるかについて
第三章　あまねく万人の幸福をねがう心について
セクションⅢ　自制心について
第Ⅵ部の結論

第Ⅵ部[1]　美徳ある人柄について。三つのセクションから構成

序　論

1　個人の人柄を考察するとき、わたしたちは自然にそれをふたつの違う観点からながめます。個人の人柄は、第一に、本人自身

の幸福に影響するものとして、第二に、ほかの人びとの幸福に影響するものとして考察されます。

セクションⅠ　本人自身の幸福に影響するものとしての個人の人柄、すなわち、目先が利いて注意深い資質［予見注意力］について

1　身体をやしない、健康な状態を保つことは、自然がまず各個人に気づかいなさいと勧告する目標であると思われます。飢えやのどの渇きからくる欲求、快楽と苦痛あるいは暑さと寒さなど、心地よく、あるいは心地悪く感じられる作用は、自然そのものの声によって伝達される教訓であり、上の目標を実現するために、なにを選ぶべきか、なにを避けるべきかを各個人に指示します。各人が幼年期の監護者から教わる第一の教訓は、その大半が、まさしくこの目標を指向しています。監護者の主要な目標は、どうすればケガをしないですむかを教えることです。

2　人が成長するにつれてじきに分かってくることですが、上の自然の欲求を満足させる手段、快楽を手に入れたり苦痛を避けたりする手段、心地よい冷暖を手に入れたり不快な寒暑を避けたりする手段、これらを用意するには、なにがしかの注意力と予見能力がなくてはなりません。この注意力と予見能力を適切にふるうことが、いわゆる世上の財貨を保持・増進する技術の本質です。

3　地上の財貨がもたらす福利は、元来、身体をやしなう必需品や快適な備品をそろえるために、わたしたちに勧告されるのですが、それにもかかわらず、世間で長く暮らしていると、「同格市民からの尊敬、生活拠点の社会集団で有する信用と地位は、そんな福利をどれくらい持つか、あるいは持つと思われているかということにずいぶん左右される」と思い知らされます。

同格市民から尊敬される適切な対象になりたいとか、同格市民のあいだでこうした信用や地位に値し・それを手に入れたいとい

（1）スミスは出版元に宛てた一七八九年三月三一日の手紙で『道徳感情論』第六版の準備について以下のように説明している。「わたしは第五部のすぐあとに全く新しい第六部を挿入しました。それは、美徳ある人柄という題名をもち、実践的な道徳学体系を含みます。」*Corr.*, p. 320. スミスは、後出 VII. iii. intro. 3 において、理論的道徳学と対立する用語として実践的道徳学の意味を説明している。

四

う欲望は、わたしたちがいだく欲望のなかでおそらく最強のものです。したがって、この欲望こそ、財貨の福利を得たいという切なる思いを掻きたて・焚きつける強力な原因であって、それは身体をやしなう必需品や快適な備品をすべてそろえたいという欲望よりもずっと強力です。なぜなら、身体をやしなう品々はいつでもずいぶん簡単にそろうからです。

4　また、同格市民のあいだでわたしたちが得る地位と信用は、おそらく美徳の持ちぬしならばその唯一の決め手であってほしいと願うもの――自分の人柄とふるまい、あるいは、それらがともに暮らす人びとに自然に掻きたてる、信頼の情・敬意・善意――によっても大きく左右されます。

5　個人の健康、財貨、地位・評判は、その人が現世で居心地よく幸せに暮らすために依拠する主要な対象と思われていますが、そんな対象を当該個人が気づかうことは、ふつう予見注意力と呼ばれる美徳の適切な仕事であると考えられます。

6　すでに考察しましたが[2]、良い境遇から悪い境遇に転落するとき味わう苦しみは、悪い境遇から良い境遇に上昇するとき味わう歓びよりも、その強さにおいて断然まさっています。ですから、身の安全こそ、予見注意力の第一にして主要な目標です。予見注意力は、わたしたちの健康、財貨、地位・評判をどんな危険な目にあわせるのもいやがります。それは、新しいことを企てるより、むしろ危険に警戒を怠らない力であり、また、わたしたちを積極的に衝き動かして福利をいま以上に多く獲得させるより、わたしたちがすでに持っている福利を保存したいと願います。予見注意力がわたしたちに財貨を増殖させる方法としておもに勧告するのは、損失や危険な目にあわせない手段、つまり、商売・職業における真の知識と技能、それを行使する際の抜かりなさと勤勉、あらゆる出費における倹約であり、また、ある程度の吝嗇さえもそうです[3]。

7　目先が利いて注意深い人はいつでも真剣・熱心に勉強しますが、その理由は、「理解している」と公言してはばからないすべてを理解するためであって、他人に自分が理解していることを納得させるためだけに勉強するのではありません。ですから、彼の

才覚は、ずぬけてすばらしいとはかぎりませんが、いつでも完全に純粋です。

彼は、人目をくらますペテン師の狡猾な手練手管や、肩ひじをはった衒学者の横柄な風貌や、浅薄で厚かましいはったり屋の自信満々の説経によって、つけいろうとはしません。彼は、自分が真にもっている才能でさえ、ひけらかすことはありません。彼の語らいは、素朴で慎みがあり、また、彼は、ほかの人が使ういかさま師のやり口をすべていやがり、やたら自分を売りこみ・公衆の目に止まって評判を得たりはしません。彼が職業上の評判を求めて思わず自然に頼る先は、大抵、ゆるぎない自分の知識と才能です。

それに、彼は、必ずしもあの小さな倶楽部や同人仲間からひいきしてもらおうと思うわけではありません。この同人仲間は、高等な学芸や科学の分野で、しばしばみずからが功労を評価する最高の裁判官になって、互いの才覚と美徳をほめ上げる一方、自分たちの才覚・美徳と競合しうるものは何もかも公然と否定することに専念します。[4] たとえ彼がこの種の社会集団とつながりをもつとしても、自衛だけが動機であり、公衆につけいるつもりはなく、むしろ、その目的は、公衆が彼の所属する社会集団やほかの同業者の喧騒・うわさ・陰謀におどらされて彼を不利にするのを防ぐことです。

8　目先が利いて注意深い人はいつも誠実で、うその発覚にともなう不名誉に身をさらすと考えただけでぞっとします。しかし、彼は、いつも誠実であるとはいえ、気さくで隠しごとをしないとはかぎりませんし、真実以外は口にしないといっても、真実を包み隠さず言うべく正式に要請もないのに、つねにそうしなければならないと考えるわけではありません。彼は自分の行為について慎重であり、しからば、発言についても遠慮がちであり、事物や人物について自説を拙速に必要もなく押しつけることはけっしてありません。

（2）I. iii. 1. 8.
（3）*WN* II. iii. 15-19 でスミスが倹約について分析している箇所を参照。
（4）前出 III. 2. 23 参照。

五

六

9　目先が利いて注意深い人は、だれよりもきめこまやかな神経によって際立つとはかぎりませんが、友人関係を築く能力はつねにしっかりしています。しかし、その友情は、熱烈・情熱的でなく、あっさりした親愛の情であることがごくふつうで、若く経験の浅い青年の高潔無私からみれば、情熱的なほうがまこと甘美に映ります。その友情は、長年信頼しあう・選びぬかれた数人の仲間によせられ、淡々としていますが、ゆるぎなく忠実な愛着です。そんな仲間の選択にあたって彼を導くのは、輝かしい業績に対するのぼせた賞賛でなく、慎み・思慮分別・善良なふるまいに対する冷静な敬意です。しかし、彼は、友人関係をしっかり築けるといっても、だれかれとなく友好をむすぶ心理的習性が旺盛なわけではありません。彼は、愉快でにぎやかな語らいをもって名をはせる宴席に足しげく通うことはまずありませんし、いわんやそんな宴席の花形になったりはしません。宴席の生活ぶりは、彼の紀律正しい節制を妨げることがあまりにも多く、ゆるぎない勤労意欲に水をさし、厳格な倹約を中断させるおそれがあります。

10　しかしです。この人の語り口は、とてもはつらつしているとか飽きさせないものとはかぎりませんが、神経を逆なでするところはつねに一つもありません。彼にとって、癇癪や非礼のせいで責められることは、考えるだけでもいまわしいことです。彼は、不謹慎に僭越な態度をだれにも取りませんし、日常の折々ではいつでも、同格市民の上座よりむしろ下座にすすんで身を置こうとします。彼は、ふるまいの点でも語らいの点でも、節度をきちんと守り、ほとんど宗教的な潔癖さをこめて、社交上の確立した礼式・儀式のすべてを尊重します。そして、この点で彼は、とてもよいお手本です。たしかに、彼よりもはるかに華麗な才覚・美徳をもった人たちは、ソクラテスとアリスティッポス[5]の時代から、スウィフト博士とヴォルテールの時代にいたるまで、また、フィリッポスとアレクサンドロスの時代から、モスクワのピョートル大帝[6]の時代にいたるまで、いつの時代にもいました。しかし、彼らは、暮らしや語らいの日常的な礼式のすべてをやたらと軽蔑し、きわめて不適切でずうずうしくさえある態度をもって名をはせ、それとあいまって、そんな彼らのまねをしたいと夢見てその愚かな面をなぞって満足するばかりでその長所を得ようと試みもしない人たちに、有毒この上ない手本を示しました。ですから、目先が利いて注意深い人はそんな才人たちよりもずっと上等なお手本です。

11　目先が利いて注意深い人は、たゆみなく勤労と倹約をかさね、また、遠い未来ながら、おそらくもっと長く続く一段と大きな安楽・享楽が得られると期待して、すぐ目の前の安楽・享楽を断固として犠牲にします。そのとき、彼はいつでも、世の公平な観察者か、それを代表する「胸の内に住まう人」の全面的な是認によって支持され・ねぎらわれます。

公平な観察者は、働く人びとのふるまいを検査するとき、彼らの現在の労働によって自分が疲労を感じるわけでなく、また、彼らの現在の欲望にのべつせがまれて自分が誘惑を感じるわけでもありません。公平な観察者からみると、人びとが現在おかれている境遇と、将来いかにもおかれそうな境遇とは、ほとんど瓜ふたつです。公平な観察者は、このふたつの境遇をほとんど同じ時点にあるものとしてながめ、したがって、それらの境遇によって心を動かされるしかたも、ほとんど瓜ふたつです。

しかし、公平な観察者は、「主たる当事者にとって、これらふたつの境遇は似ても似つかず、自然にずいぶん違ったしかたでその心を動かす」ということを知っています。ですから、主たる当事者が、自制心を適切に発揮して行動し、現在の境遇と将来の境遇によって心を動かされるしかたが、まるで公平な観察者の場合とほとんど同じなら、公平な観察者は、そんな自制心を是認せずにはいられず、喝采さえも贈ります。

12　自分の収入がゆるす範囲で暮らす人は、少しずつでもたゆまぬ蓄財によって日々ますます上向いていく自分の境遇に、自然に満足します。この人は、厳格に吝嗇をつらぬき、きびしく仕事に打ちこんできましたが、いずれの点でもしだいにのんびりする余裕を得ます。かつて安楽も享楽もなかったとき付きまとった困難に比べると、彼がこうして少しずつ増えていく安楽と享楽を味わうときいだく満足感はひとしおです。

（5）Arisippus of Cyrene（c. 435-355 BC）は、ソクラテスに学び、その後にキュレナイカ派の哲学を創始した（彼と同名の孫が創始者とされることもある）。彼は伝統に従い、快楽主義の理論家でもあり実践家でもあった。スミスは彼のことをクセノフォンの *Memorabilia* およびディオゲネス・ラエルティウスの *Lives of Philosophers* から知っていたと思われる。

（6）Philip II of Macedon（383 or 382-336 BC）は、マケドニアのアレクサンドロス大王（356-323 BC）の父親。ピョートル大帝については、IV.1.11, note 7 を見よ。

七

八

彼は、まこと居心地のよい境遇を変えたいとあせったり、新しい事業・冒険に乗り出したりはしません。なぜなら、そんな事業・冒険は、現に彼が味わっている確かな心穏やかさを危うくするおそれがあるのに、そこに賭けても心穏やかさを増進する見込みはありそうにないからです。彼が、新しい企画・事業に乗り出す場合、それは、たいてい遺漏なく練りあげられ、入念に準備されています。彼は、新しい企画・事業にいやおうなく急きたてられたり駆りたてられたりすることがけっしてなく、そこからいかにも起こりそうな結果を沈着冷静に秤量する時間と余裕をいつでももっています。

13　目先が利いて注意深い人は、自分の義務が課さない責任まですすんで引き受けたりはしません。彼は、自分となんのかかわりもない仕事であくせく立ち回ったり、他人の身のうえにお節介をやいたり、だれも頼んでいないのに相談員・助言者と称して助言を無理強いしたりはしません。彼は、自分の義務が許可するかぎり、自分の用事だけに専念し、ですから、他人の用事の処理にいささか影響力があるところをみせて株をあげたいと望む人は多いのですが、そんな愚かしい偉さは彼の趣味ではありません。

彼は、党派的論争に参加することをいやがり、党内抗争を憎み、気高く立派な野心の声にさえもつねにすすんで耳を傾けるわけではありません。彼は、名指しの招請を受ければ、公務就任を断らないでしょうが、自分を売りこむために密謀をめぐらせたりはしません。むしろ、自分がその公務の労をとって運営の責任を引き受けるより、ほかのだれかが首尾よく運営してくれれば、彼にはそのほうがよほどうれしいでしょう。彼は心の底で、たしかな心穏やかさをだれにも邪魔されずに味わいたいと思っており、それは、成功した野心が放つどんな空しい輝きにもまさるばかりか、きわめて偉大で豪胆な行為の遂行がもたらす真のゆるぎない栄光にもまさります。

14　要するに、予見注意力は、当人ひとりの健康、財貨、地位・評判を気づかうためだけにふるわれる場合、ずいぶんと仰ぎ見られ、また、多少はいつくしまれる心地よい資質とさえ見なされますが、いとしくてたまらない、また、尊くてたまらない有数の美徳とはけっして考えられません。予見注意力は、しかるべき冷ややかな敬意を勝ちえますが、さほど熱烈な愛慕・賞賛をえる資格をもつとは思われません。

15　賢く怜悧なふるまいは、当人ひとりの健康、財貨、地位・評判を気づかうことより偉大で気高い目的をめざす場合、しばしば「目先が利いて注意深いこと」と呼ばれ、それはとても適切な呼び名です。わたしたちは、偉大な司令官、偉大な政治家、偉大な立法者の予見注意力について語り、そんなすべての例において、予見注意力は、それよりも偉大で華々しい多くの美徳――武勇、広く深く他人の幸福をねがう心、正義の準則を神聖視する心、適度の自制心に支えられるこうした美徳のすべて――と結びついています。

この卓越した予見注意力がきわめて完璧に実行される場合、そこにはきっと、およそ起こりうるどんな事情・境遇のもとでも完全無欠の適切さで行動する技術、才覚、習慣・心理的習性が想定されます。そんな予見注意力は、すべての知的な美徳と道徳的な美徳が最高度に完成することをきっと想定します。それは、最善の心と最良の頭脳の提携であり、きわめて完全な美徳ときわめて完全な知恵の結合です。それは、ほとんどアカデメイア学派や逍遥学派[7]の賢人の人柄と同じであり、一方、低級な予見注意力は、エピキュロス学派の賢人の人柄です。

16　ただ目先が利かず不注意である、つまり、自分自身の面倒をみる力がないだけであることは、高潔無私で情け深い人たちにはいたわりの対象であり、さほど感情が繊細でない人たちには、無視すべき対象、最悪でも軽蔑の対象ですが、憎しみや怒りの対象ではありません。

しかし、そんな不注意は、ほかの各種悪徳と結合すると、悪徳につきまとう悪名・不名誉をきわめてひどくするのであって、もしそんな結合がなければ悪名・不名誉もそこまでひどくはなりますまい。人目をあざむく与太ものは、器用で巧妙な手ぎわによって、強い嫌疑は免れずとも処罰や指名手配を免れ、大目にみられて世間に受け入れられることがごくふつうにありますが、もとよりそんな彼らが赦免に値するはずはありません。不器用で愚鈍な与太ものは、そんな器用で巧妙な手ぎわではありませんから、有罪判決を受けて処罰され、万人からあまねく憎まれ・軽蔑され・あざ笑われる対象です。

（7）プラトン学派とアリストテレス学派の別称。

重大犯罪がしばしば処罰されずにすまされる国では、陰惨きわまりない行為は、ほとんど見慣れたものになり、正義が厳格に執行される国であまねくいだかれる戦慄を人心に刻まなくなります。どちらの国でも、不正義は同じものですが、一方、目先が利かない不注意は、ずいぶん違うことがよくあります。正義が厳格に執行される国で、重大犯罪は［不正義であり、かつ］証明するまでもなく甚だしい愚挙ですが、不正義が放置される国で、犯罪は［不正義であるが］愚挙とみなされるとはかぎりません。

イタリアでは、一六世紀の大半にわたり、暗殺、謀殺、また、裏切りによる謀殺さえ、上流身分のあいだでほとんど見慣れたものだったように思われます。チェザレ・ボルジアは、隣国の弱小君主の四人を招待してセニガリアで親善会議を開きました。彼らはみな、小さいながら主権をもち、みずからの小さな軍隊の指揮権をにぎっていましたが、ボルジアは彼らがセニガリアに到着したとたん、全員を殺害したのです。この悪名高い行為は、犯罪が横行していたその当時でさえ是認されることはむろんありませんでしたが、下手人の評判をおとしめることにほとんど寄与せず、その身を破滅させることにはまったく寄与しなかったように思われます。ボルジアの身の破滅は数年後にやってきましたが、その原因はこの犯罪とはまったく無関係なものでした。

たしかにマキャヴェリは、口をきわめて道徳学を説く人でなく、彼の同時代からみてもそうでしたが、そんな彼が、フロレンス共和国の大臣としてチェザレ・ボルジアの宮廷に滞在していた時にこの犯罪は実行されました。マキャヴェリはわざわざこの事件について一書をものしており[8]、そのことば遣いは、曇りなく、華麗、しかも簡潔であって、彼の著作のなかでも群をぬいています。彼はとても冷めた目でこの事件を語り、チェザレ・ボルジアがその犯罪を指揮した巧妙な手ぎわをよろこぶ一方、被害者のうかつさ・気弱さを大いに軽蔑し、被害者のみじめで早すぎる死をいたわらず、彼らを謀殺した犯人の残酷さ・虚言に少しも怒りをぶつけません。

偉大な征服者の暴力や不正義は、愚にもつかない驚嘆や賞賛をこめて見られることが多いのに、同じ暴力や不正義でも、こそどろ、強盗、謀殺犯がはたらけば、いつだってそれをみる目には軽蔑、憎しみ、また、戦慄の色さえ浮かびます。偉大な征服者の暴力と不正義は、比べものにならないほど大きな危害と破滅をもたらすのに、首尾よくいけば、この上なく英雄的な豪胆のなせる業として不問に付されることが多いのです。一方、こそどろ、強盗、謀殺犯の不正義や暴力は、いつだって憎しみと嫌悪のこもる目で見られ、世間の最底辺に生きる・とりえ一つない人間のやる犯罪で、かつ愚挙でもあるとみなされます。たしかに、偉大な征服

者のこんな所業は、こそどろ、強盗、謀殺犯のそれに比べると、少なくとも不正義の程度は、同じひどさですが、しかし、愚かしさ・目先が利かない不注意の程度は、さほどひどくありません。よこしまでとりえがない人間でも要領がよければ、しばしば実際の値打ちよりもずっと大きな信用を得て世間をわたっていきます。他方、同じくよこしまでとりえがない人間でも愚鈍ならば、あらゆる人間のうちでこれほど憎らしく軽蔑に値するものはいないとつねに映ります。予見注意力は、ほかの美徳と結びついて無上の気高い人柄を織りなし、しからば、目先が利かない不注意は、ほかの悪徳と結びついて途方もなく下劣な人柄を織りなします。

セクションⅡ　他人の幸福に影響しうるものとしての個人の人柄について

序　論

1　個人の人柄が他人の幸福に影響しうるとみられる場合、その人柄の影響力は、他人を傷つける心理的習性、あるいは、他人に恵みをもたらす心理的習性に起因するにちがいありません。

2　公平な観察者の目からみて、およそ隣人の幸福を傷つけたり妨げたりすることを正当化できる動機は、未遂・既遂の不正義に向けられる適切な憤りだけです。それ以外の動機から他人の幸福を害することは、それだけで正義の法を踏みにじる行為であり、強制力を行使して取り締まったり処罰したりしなくてはなりません。

あらゆる国家やコモンウェルスの知恵は、その社会の強制力を行使して、国の権威に服する人びとが互いの幸福を傷つけたり妨害したりしないように、力のかぎり彼らを取り締まります。国の知恵がこの目的のために打ちたてる準則は、それぞれの国家・祖国の民事法と刑事法です。そんな準則の根底にある原理、また、あるべき原理は、ある特定の学問があつかう主題です。それは、

（8）*Descrizione del modo tenuto dal duca Valentino nello ammazzare Vitellozzo Vitelli, Oliverotto da Fermo, il signor Pagolo e il duca di Gravina Orsini* を見よ。マキャヴェリはこれを『君主論』の付録として一五三一年に出版した。スミスによるマキャヴェリの評定については、*Rhetoric*, XX. ii. 70 を参照。

一一

すべての学問のなかでもきわめて重要で他の追随をゆるさないのに、おそらく、従来これほど開拓されてこなかった学問もないでしょう。それは、自然法学という学問ですが、その詳細に立ち入ることは目下の課題ではありません。(9)

いかなる点でも隣人の幸福を傷つけたり妨げたりせず、たとえ法律が適切に隣人を保護できない場合でもそんなことをしない。このことを神聖視してそこに宗教的厳粛さをみとめることは、文句なしに潔白で心正しい人の人柄です。その人柄は、しかるべき繊細な気づかいができる域に達すると、それ自体がつねに高い尊敬のみならず深い恭順にさえ値し、ほかの多くの美徳――他人を案じて感じ入る心、どこまでも情け深く・他人の幸福をねがう心――をきっと伴います。この人柄は、人びとから十分に理解されており、これ以上の説明を要しません。

このセクションでわたしが説明に努めたいのは、つぎの点だけです。すなわち、自然は、わたしたちがほどこす善事の配分順序を画定していた、つまり、恵み深さという点ではずいぶん限られた能力しかもたないわたしたちを指揮してその能力を使う順序を画定していたと思われますが、その順序の根底にあるものを説明したいのです。まず、恵み深さが、各種個人に注がれる場合について、つぎに、それが各種社会集団に注がれる場合について説明します。

3　やがて明らかになるように、まさにこの無謬の知恵は、自然がおこなうほかのあらゆる司令を紀律しますが、この点でも、自然がおこなう数々の勧告の優先順位を指導します。その勧告の強弱は、恵み深さが必要である度合い、あるいは、恵み深さがもたらす利便性の度合いにつねに比例します。

第一章　自然がおこなう勧告によれば、各種個人はどんな順序でわたしたちから世話をされ、気づかわれるのかについて

1　かつてストアの哲学者が述べていたとおり、人はだれしも、第一に主として、自分自身の世話をしなさいと勧告されます。たしかに、人はだれしも、他人の世話をするより自分自身の世話をすることに、あらゆる点で適しており、またその力量をもっています。(10) 人はだれしも、自分自身の喜び、自分自身の痛みを、他人のそれよりもきめ細やかに感じます。自己の喜び・痛みは、原型

となる感懐であり、他人の楽しみ・痛みは、自己の感懐から反省や共感をつうじて写し取られた像です。前者は、実体であり、後者は、影であるといえるかもしれません。

2　本人自身に次いで、人が無上の温かな親愛の情を自然に注ぐ対象は、その人自身の家族構成員、その人とふだん同じ家で暮らしている人びと、つまり、その両親、子どもたち、兄弟姉妹です。家族を構成する人たちの幸不幸は、自然な通常のありかたからすると、彼のふるまいによってきわめて強い影響を受けるにちがいありません。彼には、こうした家族構成員に共感をよせる習慣がよほど身についています。万事についてそれが家族の心をどんなふうに動かしそうか、その人はよほど詳しく知っており、家族によせる彼の共感は、とてもきめ細やかで決然としてゆるがず、これほどの共感がその他大勢の人たちによせられることはありません。要するに、彼が家族によせる共感感情は、彼自身を案ずる心情によほど近いのです。

3　さらに、このような共感感情とそのうえに成り立つ親愛の情は、元来、わが親よりもわが子に対していちだんと強く注がれ、また、一般に、子を案ずる心やさしさは、親に対する畏敬と感謝の念よりも、能動的な原理であるように思われます。

すでに考察したとおり、[11] 事物の自然なありかたからすると、子どもの生存は、生後一定期間、なにからなにまで親の世話に頼りきりですけれども、親の生存が子どもの世話に頼るという事態は、自然には起こりません。どうやら、自然の目には、老人よりも子どものほうが大切な対象であるようで、子どものほうがずっと生き生きした共感感情を掻きたて、またそれは、ずっと普遍的な共感感情です。子どもとはそのようなものでなければなりません。子どもにはあらゆる期待がかけられ、少なくとも、あらゆる希望が託されます。通例、老人に期待がかけられたり希望が託されたりすることはほとんどありません。幼年期のいたいけな様子は、

（9）前出の発刊の辞 Advertisement 2 および本書の最後のパラグラフ VII. iv. 37 を見よ。

（10）たとえばキケロの *De officiis*, III. v. 22 および III. x. 42 を見よ。他人の幸福をねがうわたしたちの心が注がれる対象の順序を考察する後続の議論については、ibid. I. xiv. 45 & 50ff を参照。

（11）III. 3. 13.

どんなに粗暴で薄情な人の親愛の情さえもくすぐります。老年のよぼよぼした心身を軽蔑・嫌悪しないのは、有徳で情け深い人だけです。通例、老人が亡くなっても、大して気の毒がる人はいません。しかし、子どもが亡くなると、心をずたずたに引き裂かれる人がきっといるものです。

4　いちばん早く芽生える友情は、心がこの感情に対してひときわ多感なとき自然に結び交わされる、兄弟・姉妹同士の友情です。彼らが仲よくすることは、同じ家族のなかにとどまって暮らすあいだ、家族の心穏やかさと幸福にとってなくてはなりません。彼らが相互に与えうる苦楽は、その他大勢の人たちに与えうるより強力です。そんな境遇にいるせいで、相互によせあう共感は、彼らが分かち合う幸福にとってきわめて重要になり、また、自然の知恵の計らいなのですが、そんな境遇にいるせいで相互に折り合うことを余儀なくされて、相互によせあう共感は、ますます習慣化し、それとあいまって、ますます鮮やかに、ますます克明に、ますます確固不動になります。

5　兄弟・姉妹は親となってそれぞれ違う家族に分かれていったのちも友情をもちつづけるわけですから、その子どもたちがそんな親同士の友情によって結びつけられるのは自然のなりゆきです。子どもたちが仲よくすれば、その親同士の友情は発展し、子どもたちが不和であれば、親同士の友情はさえぎられます。

しかし、その子どもたちが同じ家族のなかで暮らすことはめったにありませんから、互いに相手のことをその他大勢の人たちより大切にする間柄だとしても、兄弟・姉妹の仲と比べれば、相手を大切に思う度合いは弱まります。その子どもたちが互いによせあう共感は、さほど必要でなく、しからば、さほど習慣化せず、したがってその分だけ弱まります。

6　いとこの子ども同士は、さらに関係の薄い間柄ですから、互いに相手を大切に思う気持ちも弱まります。要するに、血縁関係が薄まれば薄まるほど、親しみを感ずることはだんだん少なくなります。

7　いわゆる親しみとは、じつは、習慣化した共感にほかなりません。わたしたちは、いわゆる親愛の情の対象者の幸不幸が気がかりで、その幸福を促進するかたわら不幸を予防したいと願いますが、そんな気がかりや願いは、習慣化した共感から湧く現実の心情であるか、この心情から必然的に導かれる結論です。

血縁関係にある人びとが通常おかれる境遇は、この習慣化した共感を自然に作り出しますから、そんな人びとのあいだにはそれ相応の親しみがあるだろうと予想されます。わたしたちは一般に、そんな親しみが血縁者のあいだに実際にあるのを認め、ですから自然に、そこに親しみがあるはずだと予想します。だからこそ、血縁者同士に親しみがないことをなにかの拍子に知ったりすると、それがあることを予想していただけに、わたしたちの心は一段と痛みます。

そこで、つぎのような一般的準則が打ちたてられます。「相互にしかるべき親等内の人びとの心は、いつだってお互いにしかるべきしかたで動かされるべきで、これとは違うしかたで心が動かされるときにはつねにこの上ない不適切さがあり、ときには一種の不孝さえある」。親として心やさしさがない親、子として親を敬う心がまるでない子は、怪物の姿に映り、憎たらしいだけでなく、ぞっとする対象です。

8　具体例をみてみれば、通常なら「自然な親愛の情」をその名のとおりに生み出す事情が、なにかの偶然で欠落することはあるかもしれません。しかし、大抵は、先の一般的準則にはらう配慮が、そんな事情の欠落を多少は補い、自然な親愛の情とまるで同じではないにせよ、相当よく似た感情を生み出すでしょう。(12)

父が、なにかの偶然で子の幼年期に別居しており、子が成人して初めて同居する場合、ややもすると父が子にいだく愛着は弱まりがちです。その父が親として子にいだく心やさしさはともすれば弱まり、その子が子として父にいだく畏敬の念も弱まりがちです。また、兄弟姉妹が、相互に遠く離れた国で教育を受けた場合も同様で、彼らが感じる親しみは薄れがちです。

しかし、義務感が強い人、有徳な人に関していえば、先の一般的準則にはらう配慮があるために、あの自然な親愛の情と同じで

(12)　III. 4. 7-12 および VII. iii. 2. 6 を参照。

一五

はむろんありませんが、ずいぶんそれと似通った感情をいだくことが多いでしょう。離れ離れであるあいだでさえ、父と子、兄弟姉妹が互いに無関心であることはけっしてありません。彼らはみな、相手のことをしかるべき親愛の情を通わせるのがふさわしい人と考えますし、まこと血縁の濃い間柄に自然に湧いていたはずの友情を楽しむ境遇がいつか訪れると夢見ながら暮らします。遠くにいる息子、遠くにいる兄弟は、顔を合わせるまでは、大抵、いとしい息子であり、いとしい兄弟です。彼らは相手を傷つけたことはないわけですし、あったとしてもそれはずいぶん昔のことで、想い出すに値しない児戯として忘れられています。また、彼らが耳にしているお互いのどんな消息も、それを伝えたのが善良な人物といって差し支えなければ、これほど相手を引き立てる好意的な説明もありません。

遠くにいる息子、遠くにいる兄弟は、日ごろ近くにいるほかの息子や兄弟とは違い、非の打ちどころのない息子、非の打ちどころのない兄弟であり、そんな面々と友情や語らいを味わう幸福は、きわめてロマンティックな希望となって去来します。彼らが顔を合わせるときよくあるのですが、家族の親しみ・習慣化した共感感情をいだこうとする心理的習性が強いせいで、彼らはややもするとそんな共感感情を実際にいだいたと夢想して、あたかもそうであるかのような態度を互いに示すきらいが強くあります。

しかし、時が経ち、経験を重ねるうちに、彼らが幻滅することはあまりにも多いのではないか、とわたしは思います。親しく知り合えば知り合うほど、たいてい彼らはお互いのなかに自分が期待したのとは違う習慣・気質・性向を発見します。しかし、習慣化した共感がないせいで、つまり、「家族の親しみ」と適切に呼ばれる感情の真の原理・基礎がないせいで、いまとなっては相手の習慣・気質・性向と心安く折り合うことができません。彼らは、この心安い折り合いをほとんどいやおうなく強いる境遇に暮らしたことがなく、いざそんなふうに折り合う態度をとりたいと真摯に思いこがれても、現実にはそうすることができなくなっています。やがて彼らの親しい語らいや交歓は、さほど楽しくなくなり、ですから、そんな機会も少なくなります。彼らは、なくてはならない善行を代わる代わるほどこしあい、そのほかにも節度ある配慮を外見にあらわして、ともに暮らしつづけるかもしれません。しかし、お互いに慣れ親しんで長い年月を暮らした人びとの語らいに自然に生まれる、心からの充足・甘美な共感・信頼して打ち解けたくつろぎはどうかといえば、それを彼らが存分に味わえることはめったにありません。

9　しかし、先の一般的準則がこんな頼りない権威でもかろうじて保つのは、義務感の強い人たち、有徳な人たちの場合だけです。放蕩に生きる人、遊蕩三昧の人、見栄っぱりの場合には、その準則は見向きもされません。彼らはその準則をつゆほども尊重せず、それを話題にするときには、ほとんど常にきわめてはしたない嘲笑の口調です。したがって、彼らが早い時期から長年こうして別々に暮らすとき、きっと互いに縁もゆかりもない赤の他人になります。こんな人たちがその一般的準則にはらう敬意は、せいぜい冷淡で白々しい慇懃（それが真の配慮と似ているところは微々たるものです）しか生み出さず、こんな慇懃ですら、ほんの少し神経が逆なでされ・利害が対立するだけでも、すっかり消えるのがふつうです。

10　少年を遠方の立派な学校に入れ、青年を遠方の大学に入れ、また、若い婦人を遠く離れた女子修道院や全寮制学校に入れて教育することが、比較的上流の暮らし向きにみられますが、そんな教育は、フランスとイングランド両国にあって家庭生活の習俗をその精髄から侵し、そのあげく家庭生活の幸福を害してしまったように思われます。[13]

あなたはわが子が親に対して強い義務感をもつように育てたいと、また、兄弟・姉妹に対して親切で愛情こまやかな子に育てたいとお望みですか。そうであれば、強い義務感の子や親切で愛情こまやかな兄弟・姉妹であらざるをえない境遇に彼らをおくことです。つまり、子どもたちをあなた自身の家で教育しなさい。子どもたちには適切で便利だと思わせながら親の家から公共の学校に毎日通わせ、しかし、寝起きはいつも家庭でさせなければなりません。あなたを重んずる心が子のふるまいに課す束縛は、いつでもたいへん有益であるにちがいなく、子を重んずる心があなた自身のふるまいに課す束縛も、たいてい無益ではありません。

いわゆる公共の教育から得られるものもなくはないでしょうが、それによって失われることがほとんど確実で避けられないものもあり、そこで得られるものが失われるものを埋め合わせることなどありえません。家庭の教育は、自然が打ちたてた制度ですが、公共の教育は、人間が仕組んだからくりです。どちらがきわめて賢明な教育であると期待できるか、もちろん、いうまでもありません。

（13）*WN* v. i. f. 36参照。

一七

11　わたしたちは、悲劇や恋物語で数多くの美しく興味深い場面に出会い、それがいわゆる血統の力に基づいて仕立てられていることがあります。その力は、近親者が血のつながりをお互い知りさえしないのに、相手を案じて心にいだくと思われている驚嘆すべき親しみです。しかし、この血統の力は、悲劇や恋物語のなかだけにしか存在しないのではないかとわたしは思います。悲劇や恋物語のなかでさえ、血統の力が作用する血縁者は、同じ家で育つのが自然な間柄、つまり、親子、兄弟・姉妹にかぎられ、それ以外の仲に作用すると想定されることはけっしてありません。このような神秘的な親しみがいとこの間柄に生ずるとか、あるいは、おばやおじ、甥や姪といった間柄にさえも生ずると想像すれば、無粋の域を通り越すでしょう。

12　牧畜社会の国は、法律の権威だけでは国家の各構成員に完全な身の安全を保障できませんが、通常、そんなすべての国では、同じ一族から分かれたいろんな支族は、互いに親密な近所づきあいをしながら暮らすことを選びます。[14] 彼らの連帯は、しばしば共同の防衛にとって必要不可欠です。彼らはみんな、上級の支族から下級の支族にいたるまで、互いに重要な存在意義を多かれ少なかれもっています。彼らの協和は、彼らが必要とする連帯を強化する一方、彼らの不協和は、いつでもその連帯を弱め、破壊するおそれもあります。彼ら相互のつきあいは、ほかの部族の構成員とのつきあいよりも親密です。同じ部族の構成員であれば、互いに血のつながりがどんなに薄くてもなんらかの血縁を主張し、血縁以外の事情が等しければ、それを主張できない人よりも格上の気づかいで待遇されるべきだと期待します。それほど昔のことではありませんが、かつてスコットランドの山岳地帯では、族長が同じ部族のもっとも貧しい男を血のつながった自分のいとこと見なしていました。これと同様の遠縁にまでおよぶ配慮は、タタール人、アラブ人、トゥルクメン人にあるといわれますし、スコットランドの山岳地帯の人びとが今世紀初頭におかれていたのとほぼ同じ社会状況にいるすべての他国民にもある、とわたしは思います。

13　商業社会の国は、法律の権威だけでその国家のどんなに低い身分の人さえも保護することがいつも完全にできるのですが、そんな国では、同じ一族から派生した子孫たちは、前記のように連帯する動機をもたず、利害関心や欲求がおもむくとおりに自然に交流をやめ、離れ離れになります。やがて彼らは、相互にとって重要な存在ではなくなり、二、三世代のうちに、互いにまったく

世話をやかなくなるばかりか、共通の出自であること、祖先たちのあいだに血のつながりがあったこともまるで忘れます。この文明化された状態が久しくつづき、磐石になればなるほど、どんな国でも、遠縁の親族への配慮はだんだん弱くなります。この状態は、スコットランドよりもイングランドにおいて久しくつづき、磐石になり、ですから、スコットランドではイングランドよりも、遠縁の親族のことが深くかえりみられます。もっとも、この点について、両国の差は日増しに小さくなっていますが。

たしかに、どんな国でも、大貴族たちは、お互いがいかに遠縁であろうと、血のつながりを誇らしく思い起こして認め合います。そんな由緒ある血縁関係を思い出すと、彼らはみな家柄への誇りを少なからずくすぐられます。このような記憶がまこと大切に保存されるのは、親しみからでも、親しみに似た感情からでもなく、見栄のなかでも一番つまらない子どもじみた動機からです。仮に、身分は少し低いが血縁はおそらくずっと近い男が、身のほども知らず、そんな上流身分の人たちに、彼らの家族との血のつながりを思い出させるならば、彼らはこの人に、「わたしたちはいいかげんな系譜学者ですし、自分自身の家族の歴史についてほんのわずかしか知りません」と言うにきまっています。そんな身分階層にいわゆる肉親の情が通常の域を越えて広がることを期待しても御門違いではないか、とわたしは思います。

14　いわゆる肉親の情は、親子の仲に推定される実の血のつながりよりも、精神的なつながりから生じる結果であるようにわたしには思われます。たしかに、疑り深い夫は、わが子が妻の不実から生まれた子だと思い込み、親子の精神的なつながりがあるにもかかわらず、また、子が彼自身の家で教育されてきたにもかかわらず、しばしばこの望まれない子を憎い・忌々しいという目でみます。その子は、不快きわまる冒険、彼自身の不名誉、そして、彼の家族の不面目を、いつまでも記念する証なのです。

15　気性が円満な人同士には、互いに折り合っていかねばならなかったり、そうすることが好都合であったりする状況があると、

（14）スミスは行論にあたり、社会に四つの「段階」ないし一般的な型、つまり、狩猟社会、遊牧社会、農耕・牧畜社会、商業社会があるという理論を使った。とくに、*WN* v. i. a-b および *LJ* (A) i. 27-35, (B) 149 を見よ。

一九

同じ家族に生まれて暮らす人たちに生ずるのと変わらない友情が生まれることがとてもよくあります。公務に携わる同僚や商売上のパートナーは互いを兄弟と呼び合い、たいてい本当に兄弟であるかのような感情を互いにもちます。仲よくすることは彼らみんなにとって福利ですから、それなりに理非をわきまえる人なら、つい仲よくするのが自然です。わたしたちは、彼らが仲よくやるはずだと期待しますから、彼らが仲たがいすれば、それは、小さいながら耳目を驚かす事件といえましょう。ローマ人はこの種の愛着を necessitudo という語で表現しましたが、それは、語源からすると、境遇の必然性によって押しつけられたという事情を意味するように思われます。(15)

16　同じ地域で近所づきあいをしながら暮らすというありふれた事情でさえ、上述したのと同じ種類の効果をなにがしかもっています。わたしたちは、毎日顔をあわせる人の体面を、その人から神経を逆なでされたことがなければ、重んじます。人びとは、居心地満点の隣人同士であることも、逆に、迷惑千万な隣人同士であることもあります。もし彼らが善良な気性の人たちならば、自然につい仲よくするでしょう。わたしたちは、隣人同士は仲よくやるはずだと期待しますから、悪しき隣人であることは、とても悪い人柄です。こういうわけで、しかるべき小さな善行については、近所づきあいをしている人に、そうでないほかの人よりも優先的にほどこすことがふさわしいと、万人からあまねく認められます。

17　以上のとおり、わたしたちは、いやおうなく年じゅう一緒に暮らし語らう人びとにしっかり根づく感情・原理・心情をみると、自己の感情・原理・心情をできるだけそれと折り合わせ・同化させようとする心理的習性を生来もっています。この習性があるからこそ、仲間との接触をつうじて影響を受け、つきあう仲間の良し悪しで善にも染まれば、悪にも染まるのです。賢明で有徳な人たちとおもにつきあう人は、みずからは賢明にも有徳にもならないとしても、少なくとも知恵と美徳にしかるべき尊敬の念をいだかずにはいられません。一方、遊蕩三昧の自堕落な人たちとおもにつきあう人は、みずからは遊蕩三昧・自堕落にならないとしても、少なくとも遊蕩三昧・自堕落の気風に対して当初もっていた忌々しいという感情をやがてなくすにちがいありません。

一族の類似した人柄が幾世代も連綿と受け継がれることは、ごくふつうにありますが、その原因のひとつは、おそらく上に述べ

た心理的習性、つまり、わたしたちが年がら年じゅういやおうなく一緒に暮らし語らう人びとに、思わず自分を同化させる習性でしょう。しかし、一族の人柄は、一族の顔だちの場合と似たところがあって、そのすべてが精神的きずなによって形成されるわけではなく、血統にも負うところがあるように思われます。一族の顔だちのほうは、むろんそのすべてが血統によって形成されます。

18　しかし、個人によせる愛着が、ひとえにその人の善良なふるまいと態度への敬意と是認に基づき、それが多くの経験と長年知り合いであることから確証される場合、そんな愛着はもっとも尊重に値し、他の追随をゆるしません。

そんな友情が湧きあがるのは、堅苦しい共感からではなく、また、居心地よく折り合っていくために取りつくろい・習慣として身についた共感からでもありません。それは、自然な共感から、つまり、「わたしたちが愛着をよせる人物は、敬意と是認の感情を注がれるのが自然で適切な対象である」とつい思わず感じることから湧きあがり、有徳な人同士にしか生まれません。有徳な人びとだけが、お互いのふるまいと態度に全幅の信頼を感じることができ、この信頼があるために、相互に侵害したり・されたりすることはけっしてありえないと、つねに確信できるのです。

悪徳はいつも気まぐれであり、美徳だけが紀律正しく整然としています。美徳への愛に基づく愛着が、すべての愛着のなかでもっとも有徳であることは確かであり、しからば、それがもっとも幸福であり、もっとも永続的でゆるぎないことも確かです。そんな友情は、ひとりの人だけに排他的に注がれる必要はなく、むしろ、長年親しくつきあい・だからこそその知恵と美徳にすっかり頼れる、そんな賢明で有徳な人びとをみんな包みこんでも壊れる心配はありません。

友情をふたりきりの仲に封じこめたいと思う人は、友情の賢明な安心と、愛の猜疑心と愚かしさを混同しているように思われます。通常、若い人たちの性急で物好きな愚にもつかない親交は、どこかわずかに人柄が似ているといった、善良なふるまいとはまったく無縁な理由に基づいていたり、また、おそらく、同じ研究、同じ娯楽、同じ気晴らしを好む性向に基づいていたり、あるいは、

(15)　その根本的な意味は、必要性と不可避性であり、後者の意味が、道徳的および法的な関係、つまり、友情と血縁を表すのに使われるようになったが、それは、比較的古い英語の necessitude に見られるとおりである。

二一一

一般人が採用しないどこか風変わりな主義・意見によせる賛同に基づいていたりします。突発的な理由によって始まる親交は、突発的な理由によって終わり、その関係が続くあいだどんなに心地よく映るにしても、「友情」という神聖で深い威厳をもつ名にはけっして値しません。

19　しかし、格別に深い恵みをささげる相手として自然が指定する人のなかでも、すでにわたしたちが深い恵みに浴し・身をもってその美徳を経験した相手をおいてほかに、適切だと思われる人はいません。[16] このような互いの親切は、人間の幸福にまこと不可欠であり、自然は、そんな互恵を目的として人間を造形しました。こうした自然の計らいにより、人はだれしも自分が親切にした相手からみれば、親切の格別な対象になるのです。

人間がいだく感謝の念は、恩人の恵み深さに見合うとはかぎりませんが、あの公平な観察者が恩人の功労についていだく感覚、つまり、感謝の共感感情は、つねに恩人の恵み深さに見合っています。また、ほかの人びとが恩人の功労についていだく一般的な感覚は、彼らが卑劣な忘恩にぶつける一般的な怒りのせいで増幅することさえ、ときにはありましょう。

他人の幸福をねがう心の持ちぬしが、その心の果実をすっかり失った例は一つもありません。彼は、その果実を収穫するはずだった相手から収穫するとはかぎらなくても、ほとんどつねにほかの人びとからはそれを収穫し、しかも、収穫量は十倍にも増えるのです。親切は、親切を産む親です。つまり、同類市民から慕われることが、わたしたちの野心の大きな目標であるならば、それを手に入れるもっとも確実な方法は、同類市民を心から愛することをふるまいによって示すことです。

20　自分と血縁があるとか、相手の身に良き資質があるとか、かつて献身してくれた相手であるという理由で、恵み深くしなさいと［自然によって］勧告される人たちの次にくるのが、いわゆる友情を注ぐ相手とはたしかにいえないものの、幸福を気づかって善行をほどこす相手として［自然によって］指定される人たちです。それは、並大抵でない境遇によって際立つ人、つまり、大きな好運に恵まれた人と大きな不運に見舞われた人、金持ちと権力者、貧乏人と破産者です。

身分地位の区別、[17] 社会の平和と秩序の根底には、金持ちと権力者を前にしてわたしたちが自然にいだく尊敬の念が、かなり根深

く存在しています。人間の不幸に対する救済と慰撫は、もっぱら貧乏人と破産者を前にしてわたしたちがいだくいたわりに依拠しています。社会の平和と秩序は、不幸な人たちの救済をもしのぐ重大事項です。[18] ですから、上流身分の人たちを前にしていだく尊敬の念は、ともすると過剰なせいで神経を逆なでし、一方、不幸な人たちを前にしていだく同類感情は、ともすると不足するせいで神経を逆なでするきらいがきわめて強くあります。道徳学者らは、慈愛といたわりをしきりに勧め、また、上流身分のことに熱中しないように警告します。実際、そんな熱中は猛烈であって、賢く有徳な人たちよりも金持ちと権門が優遇されることは、ごくふつうにみられます。

自然は、賢明にも、「身分地位の区別、社会の平和と秩序がしっかり安定するには、目に見えず不確かなことも多い・知恵と美徳の差に基づくよりも、明白で歴然とした・出自と運勢の差に基づくほうがよい」と判断しました。世間の大衆の鈍い眼力でも、出自と運勢の差であれば、十二分に感じとることができます。一方、賢明で有徳な人びとの精妙な鑑定眼は、知恵と美徳の差を識別できますが、それに苦労する場合もときにあります。以上の順序で並ぶどの勧告にも、他人の幸福をねがう自然の知恵が等しく明証されています。

21　おそらく留意する必要もないことかもしれませんが、親切心を掻きたてる上記の原因のうち、二つかそれ以上の原因が結びつくと、親切心は高まります。嫉妬心がなければ、自然にわたしたちは上流身分に好意をいだいてひいきしたいと思いますが、その

---

(16)　前出 II. ii. 1. 3 参照。

(17)　前出 I. iii. 2 参照。[また、「このように、わたしたちは、思わず金持ちや権力者を賞賛し、またほとんど崇拝するといってもよい心理的習性をもち、また、貧しくうらぶれた生活条件の人を見下し、少なくとも無視する心理的習性をもっています。これは、身分階層の別と社会秩序を打ち立て、これを維持するのに不可欠ではありますが、同時にまた、わたしたちの道徳感情を腐敗させる強力かつ最も普遍的な原因です。」(I. iii. 3. 1)]

(18)　前出 II. ii. 1 参照。[また、「恵み深さは、建築物を装飾する飾りであって、それを支える土台ではなく、したがって、勧告されるだけで十分だったのであり、押しつけられる必要はまったくありませんでした。これとは対照的に、正義は、建物全体を維持する大黒柱です。もしもこれが取り除かれるとすれば、どうなるでしょう。人間社会を形づくる偉大で壮大な仕組みを現世に築き上げ支援することこそ、妙な言い方ですけれども、自然が注ぐ格別で愛情一入の配慮であったと思われますのに、それが一瞬で粉々になり元素にもどるにちがいありません。」(II. ii. 3. 4)]

心持ちは、高い身分とあいまって知恵と美徳もある場合に、いっそう高まります。

上流身分の人が、その知恵と美徳にもかかわらず、非運・危険・辛酸に陥り、しかもきわめて高貴な身分がしばしばそこにきわめて陥りやすい場合、その運勢によせる関心は、美徳の程度が同じであれば、身分の高いほうにずっと深く引きよせられます。悲劇と恋物語のもっとも興味深い主題は、有徳で豪胆な王侯君主の非運です。彼らが知恵と男らしさをふりしぼって非運から脱けだし、かつての高い地位と身の安全をすっかり回復するならば、わたしたちは、すさまじく熱を帯び、野放図ですらある賞賛をこめて彼らを見ずにはいられません。わたしたちが彼らの辛酸を前にして感じる悲痛と、彼らの順境を前にして感じる歓びが結びつくと、その身分と人柄の両面から自然に心にいだく身びいきな賞賛の念は、大きくふくらむように思われます。

22　以上のような恵み深い心のいろんな動きが期せずして四方八方に流れ出すとき、ある心の動きに従わねばならないのはどんな場合だろうか、また別の心の動きに従わねばならないのはどんな場合だろうか、という問題を精緻な準則に照らして確定することは、たぶんまったく不可能です。どんな場合に友情は感謝の念に従うべきか、どんな場合に感謝の念は友情に従うべきか、また、どんな場合に肉親の情の最強のものさえ、社会全体の安全をしばしば左右する上位者の身の安全への配慮に服するべきか、どんな場合に肉親の情は、そんな配慮に勝利しても不適切でないか。

このような問題は、胸裏に住まうあの人、居ると推定される公平な観察者、わたしたちのふるまいの偉大な裁判官であり仲裁人、そんな彼がくだす判断に、ことごとくゆだねられなければなりません。わたしたちがわが身をまるきり彼の境遇におき、本当に彼の目で自己をながめて彼と同じ見方でわたしたちを見、そして、彼からもらう示唆を熱心に恭しく傾聴するならば、その声はけっしてわたしたちをあざむかないでしょう。わたしたちは、決疑論の準則がなくても自分のふるまいを指揮できるでしょう。[19] 往々、決疑論の準則は、さまざまな陰影・濃淡をもつ事情・人柄・境遇すべてと折り合うことはできません。そこでの差異・区別は、感じとれないわけではありませんが、微妙で繊細なために、まったく定義できないことが多いのです。

ヴォルテールのかの美しい悲劇、『シナの孤児』[20]で、ザムティは、わが古来の主権者・主君のいたいけな唯ひとり遺された王子の命をまもるため、わが子の命をすすんで犠牲にしようとしますが、わたしたちはその豪胆を賞賛します。その一方で、イダーム

は、夫の重大な秘密を明かす危険を冒し、残忍なタタール人の手に引き渡されていたわが児を送還するよう公然と要求しますが、わたしたちは、彼女の母としての心やさしさを許すばかりか、いとしみます。

第二章　自然がおこなう勧告によれば、各種の社会集団はどんな順序でわたしたちから恵み深くされるかについて

1　各種の社会集団がわたしたちから恵み深くされる順序について自然がおこなう勧告は、各種個人がわたしたちから恵み深くされる順序について自然がおこなう勧告と同じ原理により、また、同じようにして指示されます。わたしたちから恵み深くされることがきわめて重要な意味をもつか、もちうる社会集団こそ、わたしたちから恵み深くされる第一の主要なものとして勧告されるのです。

2　わたしたちは、国家・主権国のなかに生まれ・そこで教育をうけ、その保護下に暮らしつづけ、通例、そんな国家・主権国は、わたしたちのふるまいの良し悪しによって、その幸不幸を大いに左右される最大規模の社会です。ですから、国家は、わたしたちから恵み深くされるべきものとして、自然によってきわめて強く勧告されます。[21]

通常、国家に包含されるのは、わたしたち自身だけでなく、わたしたちがこよなく深い親愛の情をよせる対象のすべて――わが子、わが親、わが親族、わが友人、わが恩人――、そして、わたしたちがこよなく愛し・畏敬するのが自然なすべての人たちもそこに含まれます。彼らの順境と身の安全は、多少とも国家の順境と安全に依存しています。ですから、国家がわたしたちに自然に慕わしく感じられるのは、私事にかまける心のあらゆる動きによるばかりでなく、身近な他人の幸せをねがう心のあらゆる動きにもよるのです。

---

(19)　後出 VII. iv. 7-35 参照。

(20)　*L'Orphelin de la Chine* (1755). スミスの蔵書のなかのお気に入りの一冊。'Letter to the Editors of the *Edinburgh Review*', 17 (in *EPS*) 参照。

(21)　キケロ *De officiis*, I. xvii. 57 参照。

わたしたち自身と国家につながりがあればこそ、国家の順境と栄光は、わたしたちの身のうえになにがしかの名誉を投影するように思われます。わたしたちは、自分の国家をほかの同種の社会集団と比べて、それが他国に優越していれば鼻を高くし、どこか後れをとっていると映れば、多少とも気が滅入ります。過去の時代に（というのは、自分自身の時代に属する人物に対しては、いささか嫉妬心がはたらいて公正な判断ができないことがあるかもしれないので）わが国が輩出した輝かしい事績の有名人は、わが国の戦士、政治家、詩人、哲学者、あらゆる種類の知識人にいますが、わたしたちは思わず、きわめて身びいきな賞賛の目で彼らをながめ、ほかのすべての国民が輩出したそんな人たちの上位に（ときにはきわめて不当に）おきます。

この社会集団の安全、いや、その見栄のためにさえ、わが命を投げだす愛国者の行動の適切さは、まったく申し分ないと映ります。彼は、公平な観察者がきっと自然に彼をながめる視点に立ち、わが身を大勢のなかのひとりにすぎないと見る、と映ります。その衡平をおもんばかる裁判官の目からみれば、彼は、国家のほかの構成員と比べてなんら特別でなく、もっと大勢の人たちの安全、利便、また、栄光のためにさえも、つねにわが身を犠牲にし、全身全霊を傾けなければなりません。

しかしです。この自己犠牲は、まったく正当で適切であると映りますが、その実行がどんなにむずかしく、また、それをなしうる人がどんなに少ないかをわたしたちは知っています。ですから、彼のふるまいは、わたしたちの全面的な是認感情ばかりか、無上の驚嘆と賞賛の念をも掻きたて、その功労は、きわめて英雄的な美徳にふさわしい最高の喝采によって報われるべきであると思われます。

これとは逆に、反逆者は、どこか特異な境遇にいて、母国の利益を交戦相手国に売り渡して自己の小さな利益を推進できると夢想しますが、そんな彼は、胸の内側のあの人の判断を無視して、自分とかかわりのあるほかのだれよりも自分自身を優先し、この点でまこと恥知らず、まこと卑劣です。こんな反逆者は、あらゆる悪党のなかでも一番いとわしいと映ります。

3　わたしたちは、自国民を愛するせいで、近隣の他国民が繁栄し台頭するのをみると、きわめていじわるい猜疑心と嫉妬心を思わずいだくことがよくあります。独立した隣り合う諸国民は、紛争に決着をつける共通の上位者をもちませんから、みなお互いに絶えず戦々恐々とし疑心暗鬼になって暮らしています。各主権者は、ほかの近隣の主権者からほとんど正義を期待しませんから、

相手に期待しない正義にはできるだけ従わずに他国の主権者を遇する傾向があります。

独立国家は、相互の外交交渉にさいして諸国民の法を遵守する義務があると公言し、またそう考えているそぶりをしますが、しばしばこの準則に対する配慮は、体裁をよそおい・口先で宣伝する域をほとんど一歩も出ません。きわめて小さな利益を得ようとして、また、ほんの少し腹立たしい扱いを受けただけで、これらの準則は、恥も悔恨もなく潜脱されたり露骨に踏みにじられたりするのが日々みられます。各国民は、隣国のどこかが勢力を増し台頭するならば自国は屈服すると予見し、あるいは、そんなふうに予見する自分たちを想像します。こうして、卑賤な原理――国民ゆえの偏見――が、しばしば、高貴な原理――祖国愛――の上に築かれます。

大カトーは、元老院でおこなったどんな演説も、演題のいかんを問わず、「なおまた、カルタゴは亡ぼされなければならないというのがわたしの意見である」という文章で締めくくったといわれますが、それは、強靱ながら粗野な心の・殺伐とした愛国主義を自然のままに表現しています。カルタゴは、カトー自身がまこと多くの苦杯をなめた異民族であり、それに対してほとんど気も狂わんばかりに激高したのです。スキピオ・ナシカは、もっと情け深い文章、「なおまた、カルタゴは亡ぼされてはならないというのがわたしの意見である」と述べてすべての演説を締めくくったといわれますが、それは、もっと度量が大きく・啓蒙された心を大らかに表現しています。カルタゴは落ちぶれて、もはやローマの手ごわい国家でなく、かつての敵国であっても、スキピオはその順境に嫌悪の情を感じなかったのです。(22)

フランスとイングランドにはそれぞれ相手の陸海軍の増強に戦々恐々とする理由があるのかもしれません。けれども、国内の幸福と順境、土地の開墾、製造業の発展、商取引の増大、港湾の安全と数、文芸と科学全般における隆盛について、両国の一方が他方を嫉妬すれば、きっと両国民のように偉大な国民の沽券にかかわります。上の事項はいずれも、わたしたちが暮らす世界を真に改善することです。こうした改善によって人類は便益を手にし、人間の自然本性は気高くなります。このような改善にあたって各国民は、われこそ抜きんでようと努めるばかりでなく、隣国が抜きんでるのを邪魔せず、人類愛からそれを後押しするべきです。

(22) Plutarch, *Lives*, Marcus Cato, 27. カトーについては、前出 V. 2. 10 の note 9 を見よ。Scipio Nasica は紀元前一三八年に執政官を務めた。

二七

以上の改善はすべて、国民ゆえの偏見や嫉妬心でなく、国民ゆえの競争心の適切な目標です。

4　祖国愛は、人類愛に由来しないように思われます。前者の感情は、後者の感情からまったく独立しており、わたしたちは時おり、祖国愛のせいで、思わず人類愛と相容れないしかたで行動することさえあります。

フランスの人口は、イギリスのおそらく三倍ちかくであるかもしれません。[23] したがって、偉大なる人類社会からすれば、フランスの順境は、イギリスの順境よりもずっと大きな意義がある目標と映るはずです。しかし、だからといってフランスの順境をイギリスの順境にいつでも優先させるイギリス臣民がいるとすれば、イギリスの良き市民とは考えられないでしょう。

わたしたちは祖国をたんに偉大なる人類社会の一部として愛するのではありません。わたしたちが祖国を愛するのは、祖国それ自体への関心からであって、上のようにひねり出されたどんな理由とも無関係です。人間の心の動きのシステム、また、自然のあらゆるほかの領域のシステムをしつらえた知恵は、「偉大なる人類社会の利益を推進する最良の方法は、各個人の主たる関心を人類社会の特定地域――その個人の才能と理解力がおよぶ範囲にあって最大のもの――に振り向けることだ。」と判断したように思われます。

5　国民ゆえの偏見や憎しみが、近隣の諸国民を越えて広がっていくことはまずありません。わたしたちは、たぶんとても浅はかで愚かしくも、フランス人を生来の敵と呼び、フランス人もやはりたぶん浅はかで愚かしくも、わたしたちのことを同様に考えます。フランス人もわたしたちも、中国や日本の順境にはいかなる嫉妬心もいだきません。しかし、わたしたちの善意が、そんな遠く離れた国に発揮されて大いに効果をあげることはめったにありません。

6　政治家の場合、公衆の幸せをねがう気持ちがきわめて広範に発揮され、通常、相当な効果をあげます。政治家は、近隣やさほど遠くない国民同士の同盟を企てて結びますが、その目的は、いわゆる力のバランスや一般的な平和・平穏を、交渉の輪に加わる当事国のあいだに維持することです。しかし、そんな条約を計画・実行する政治家の眼中には、大抵それぞれの祖国の利益しかあ

りません。

たしかに、政治家の視野がもっと広い場合も、ときにはあります。ミュンスター条約交渉のとき、フランスの全権大使ダヴォー伯は、同条約によってヨーロッパの一般的平穏を回復するためなら生命をよろこんで犠牲にしただろうといわれます（他人の美徳を過信しない人だったレスの枢機卿[24]の所論）。ウィリアム国王は、ヨーロッパの大半の主権国の自由と独立を心底熱望していたように思われますが、たぶんこの思いは、彼のフランスに対する格別の嫌悪によってずいぶん鼓舞されていたかもしれません。というのは、彼の在位中、フランスは、ヨーロッパの主権国の自由と独立をおびやかしていた主要な原因だったからです。これと同じ気概は、アン女王の最初の政府にいくぶんか伝わったように思われます。[25]

7　あらゆる独立国家は、多くのさまざまな身分団体・社会集団に細分化され、各団体は、それ自身の固有の権限・特権・免除権をもっています。あらゆる個人は、自分が所属する特定の身分団体・社会集団にどこよりも愛着をもつのが自然です。自己の利益、自己の見栄、また、多くの友人や仲間たちの利益と見栄は、所属する身分団体・社会集団とたいへん深く結びついているのが通例です。各人は、敢然として自分が所属する団体・集団の特権と免除権を拡張し、また、必死にそのほかの団体・集団の侵食から自分たちの特権・免除権を守ります。

---

(23) *WN* V. ii. k. 78 においてスミスはフランスの人口を、「イギリスのおそらく三倍の人口」の二千三百万ないし二千四百万と見積もっている。

(24) Claude de Mesmes, comte d' Avaux（1595-1650）は、ミュンスターとオスナブリュックでの会議でフランスの代表を務めた。これが一六四八年に三十年戦争を終結させた、いわゆるウェストファリアの和議である。ここでの言及は、de Retz の *Mémoires* の一六五〇年九月の項目である（前出 I. iii. 2. 11 に付した注を見よ）。

(25) ウィリアム三世（1650-1702）は、ネザランド諸州の総督（1672-1702）およびイングランド王（1689-1702）として、ルイ一四世のフランスを封じこめるために同盟関係の変更や長期の戦争を行った（1672-8, 1689-97）。アン女王（1665-1714）は、一七〇二年にウィリアムのあと王位を継承したが、その最初の政府はウィッグ党とトーリー党の連立であった。その首班、ゴドルフィン伯爵（Sidney Godolphine, 1645-1712）は、大蔵卿を務め、イギリスが大同盟に参加してスペイン継承戦争（1701-14）でフランスと戦うため、財政的基盤を固めた。この戦争の軍事的指導者はマールバラ公爵（John Churchill, 1650-1722）であった。

8　国家は、それを構成する多様な身分団体・社会集団に細分化され、また、そんな団体・集団はそれぞれの権限・特権・免除権を分配されていますが、当該国家のいわゆる国制は、そんな団体・集団がどんなふうに細分化されるのか、また、その権限が具体的にどのように分配されたのかによって決まります。

9　それぞれの身分団体・社会集団は、ほかのあらゆる団体・集団からの侵食に対して、みずからの権限・特権・免除権を維持する能力をもちますが、当該国制の安定性は、そんな団体・集団の能力に依存します。当該国制は、その従属的な部分がそれまでおかれていた地位・生活条件の如何を問わず、そこから上昇したり下降したりするときにはいつでも多少の変更を余儀なくされます。

10　以上のさまざまな身分団体・社会集団は、すべて国家のおかげで安全を保障され、侵害から保護されているわけですから、その存立は国家に依存しています。「こうした身分団体・社会集団は、すべてその国家に従属し、国家の順境と保全に奉仕するという条件のもとでのみ存続している」という命題は、各団体・集団のどんなに身びいきな一員でも承認する真理です。

しかし、この身びいきな人を説得して、「国家の順境と保全のためには、彼が所属する特定の団体・集団の権限・特権・免除権を縮小しなければならない」と得心させるのは、往々むずかしいかもしれません。この身びいきは、不当なこともありますが、だからといって無用なわけではありません。それは、革新の精神を制止します。つまり、それは、国家の細分化された部分である多様な団体・集団のあいだに確立して久しいどんな均衡も保全する傾向をもち、その当座に流行する大衆迎合的な施政上の変更を妨げると映ることがある半面、国家システム全体の安定性と永続性に現実的な貢献をします。

11　祖国愛は、通例、ふたつの異なる原理をその内部に組み込んでいるように思われます。その第一は、確立して久しい現行の国制や統治形態へのしかるべき尊重と畏敬であり、その第二は、同類市民の生活条件をできるかぎり安全で生き甲斐のある幸せなものにしたいという真剣な願望です。法律を尊重しよう、世俗の政権担当者に従おうという気が起こらない人は、市民ではありませ

ん。また、自分が自由に使える手段を尽くして同類市民がすむ社会全体の繁栄を促進したいと願わない人は、たしかに良き市民ではありません。

12　平和で静かな時代には、上の二つの原理は概して波長が合い、同一のふるまいを起こさせます。確立して久しい現政府は、実際に同類市民を安全で生き甲斐のある幸せな境遇でやしなうと理解される場合、この政府を支持することは、明らかに、そんな同類市民の境遇を保つ即効の最善策であると思われます。

ところが、公然と不満が示され、党派が争い、秩序が乱れる時代には、上のふたつの原理は別々の方向にはたらき、知恵ある人でさえ、「国制や統治形態の現状は、公衆の心穏やかさをやしなう能力を明らかに欠くと映る。なにがしかの変更をそこに加えなければならない」とつい考えるかもしれません。[26] しかし、そんな場合、「真の愛国者として、旧体制の権威を支援し・その再建に努力しなければならないのはいつであり、また、もっと大胆だが危険なことも多い革新の精神に譲歩しなければならないのはいつであるのか」という問題に決着をつけるには、国政上の知恵を最大限に駆使しなければなりません。

13　対外戦争と内戦のふたつの境遇は、公共に尽くす精神を顕示するきわめて華やかな機会を提供します。対外戦争で従軍し祖国のために戦果をあげた英雄は、全国民の願望を満足させ、だからこそ、万人からあまねく感謝され賞賛される対象なのです。内乱の時代にあって、対立する党派の指導者は、通常、半分の同類市民から賞賛されるとしても、もう半分の同類市民からは忌み嫌われます。党の指導者の人柄や、彼らが自党に便宜をはかった功労は、通常、対外戦争の場合よりも疑わしく映ります。それゆえ、対外戦争で得られる栄光は、およそ国内の党争で得られる栄光よりもほとんどいつも純粋で華やかです。

14　しかし、勝利した党派の指導者にそなわる権威が、味方を説得して落ち着いた控えめな行動をとらせるのに十分ならば（そう

(26) III. 3. 43 参照。

三一

でないことが多いですが）、彼は、祖国になくてはならない重要な献身裨益をすることがときにはあり、どんなに立派な戦勝も、どんなに広い領土の征服もそれに遠く及ばないかもしれません。彼は、その国制を立て直し・改善し、党指導者のずいぶん疑わしくあいまいな人柄を脱ぎ捨て、どんな人柄よりも偉大で高貴な人柄――大国の改革者・立法者のそれ――を身にまとい、みずからが立てた諸制度の知恵によって、国内の平穏と幸福を同類市民に末ながく幾世代にもわたって保障することがあります。

15　公共に尽くす精神の根底には、情け深い愛情、同類市民のだれかが陥るかもしれない不便や辛酸への真の同類感情があります。けれども、党派争いから生ずる騒動や秩序の乱れのただなかでは、ややもすると理論体系を重んじるしかるべき精神が、そんな公共に尽くす精神と混じり合いがちです。この理論体系を重んじる精神は、そんな心やさしい公共に尽くす精神を指導する地位にあるのがふつうであって、それをつねに高ぶらせ、しばしば燃えたぎらせて狂信的熱狂にさえします。

不満をもつ側の党派の指導者は、ほぼかならず、一見もっともな改革計画を提案し、「それによって懸案の不便は取り除かれ、焦眉の辛酸は緩和され、そればかりか、同種の不便と辛酸の再発は未来永劫防止される」と主張します。そんなわけで、指導者たちは、しばしば国制の型を改める計画に乗り出します。つまり、偉大な帝国の臣民はその統治システムのもとでおそらく数世紀にわたってずっと平和、身の安全、そして栄光さえも享受してきたのに、このシステムのもっとも本質的な部分をどこか変更しようとするのです。

不満をもった大勢の党員は、この理想的なシステムの想像上の美しさに酔いしれるのがふつうです。彼らはこのシステムについてなんの経験もなく、それは、彼らの指導者が巧みな弁舌のかぎりを尽くして目もくらむ極彩色で脚色し説示してきたものです。指導者たちは、当初みずからの台頭しか念頭になかったとしても、その多くはやがて、自分の口から出た詭弁があだとなって担がれ、追従者のうちでもっとも浅はかで愚かなものたちと同じく、この偉大な改革に熱をあげます。たしかに、ふつう指導者たちはこの狂信に染まらず冷静を保ちますが、たとえそうだったとしても、追従者の期待を裏切り失望させるようなことをあえてするとはかぎりません。むしろ、指導者は、自分の原理と良心に反してでも、まるで自分もその共同幻想をみているかのように行動しなければならぬ、としばしば感じます。

こんな党派は、どんな宥和策も、調整も、合理的妥協も、なにもかも拒絶しますが、そんな横暴な態度は、過剰な要求をしてかえってなにも得ないことがよくあります。また、少し抑制をきかせれば、大幅に除去・緩和されたはずの不便や辛酸は、いまや救済の望みを完全に断たれて放置されます。

16　公共に尽くす精神の持ちぬしが、もっぱら情け深さと他人の幸福をねがう心に衝き動かされる場合、彼は確立して久しい権限・特権を、それが個人のものであれ、また、国家の細分化された部分である上流の身分団体・社会集団のものならばなおさら、尊重するでしょう。

彼は、そんな権限・特権のどれかが多少濫用されていると考えるにせよ、それを根絶するには強大な暴力を使わねばならないことが多く、濫用の緩和で満足するでしょう。彼は、理性と説得によって人びとの根深い偏見を克服できなければ、力ずくで人びとを鎮圧しようとはしません。むしろ、キケロがいみじくも神々しい格率と呼んだプラトンの[27]、「両親に対しても祖国に対しても、暴力を用いてはならない」ということばに、宗教的厳粛さをもって服するでしょう。彼は、公共の施策をおこなう際、人びとが固く信ずる習慣・偏見とできるだけ折り合うでしょうし、人びとが服するのをいやがる規律を作らないせいで不便が生ずれば、できるかぎり充分な救済をするでしょう。

彼は、［人びとの習慣・偏見のせいで］正しい規律を打ちたてることができないとき、まちがった規律の改良にいさぎよく従事するでしょう。けれども、ソロンのように最善の法システムを打ちたてることができないときには、人びとが折り合える最善の法システムを打ちたてようと努力するでしょう[28]。

(27) Plato, *Crito*, 51c, cited by Cicero in *Epistulae ad Familiares*, I. ix. 18. *LJ* (A) v. 124 と *LJ* (B) 15 においてスミスが述べるところでは、トーリー党は政府への反抗を親に対する反抗と同一視して、それを不孝であると「主張する」。

(28) *Plutrch, Parallel Lives*, Solon, 15. ソロン（c. 640- after 561 BC）はアテネの国制も含めてその法制度の多くの点を改革した。

17　これとは反対に、理論体系を重んじる人は、ややもするとうぬぼれて自分ではずいぶん賢いつもりになりがちです。彼は、統治について自分が立てた理想的計画は美しいと思い定めてしばしばそれにべたぼれし、計画のどの箇所からのどんなわずかな逸脱にもがまんできません。彼は、自分の計画を余すところなく全部そろえて打ちたてようと突き進み、これに反発する大きな利害や強い偏見には目もくれません。

彼は、「大きな社会を構成する多様な人員の編制は、チェスの盤上の多様な駒を手で編制するのと同じように、はなはだ簡単にできる」と想像するように思われます。彼は、「チェスの盤上の駒が従う運動原理は、手が駒に加える圧力のほかにないが、人間社会という大きなチェス盤では、ひとつひとつの駒に固有の運動原理があって、それは、立法府が各駒に押しつけたいと思うかもしれない原理とは全然違う」というふうには考えません。

各駒がもつ固有の原理と、立法府が押しつける原理の波長が合い、同じ方向に向かって作用すれば、人間社会というゲームはらくらくと調和を保って進行し、大いにその幸福と成功が期待されます。これらふたつの原理が反発したり、食い違ったりすれば、そのゲームの進行は無残であって、人間社会はいかなるときも無秩序のきわみであるにちがいありません。

18　たしかに、政体と法が完成した姿を表す一般的観念、あるいはそれの体系的観念でさえも、有力政治家の定見を指導するには必要かもしれません。しかし、その観念が要求すると思われることを全部打ちたて、しかも周囲はみな反対するのにそれを一挙に打ちたてると主張することは、しばしば傲慢のきわみにちがいありません。それは、自己の判断を善悪の最高の基準に仕立て上げることであり、また、「自分だけがコモンウェルスでただひとりの賢くとりえある人物であり、同類市民のほうからわたしに歩みよるべきで、わたしのほうからそうする必要はない」と夢想することです。

以上の理由から、国政について思索する人たちはみな危険なのですが、なかでも主権をもつ君主は他の追随をゆるしません。この傲慢はすっかり彼らの身についています。彼らは、自己の判断がずぬけて卓越することを信じて疑いません。ですから、帝位・王位にあるそんな改革者が、わが政府に託された祖国の国制について柄にもなく思案に暮れるとき、その国制に見出す最大の誤りは、みずからの意思の実行を邪魔することがあるかもしれない障害なのです。

君主らは、プラトンのあの神々しい格率を軽蔑しており、「国家が彼ら自身のためにつくられたのであって、彼ら自身が国家のためにつくられたのではない」と考えます。ですから、彼らの改革の大目的は、上のような障害を取り除くこと、つまり、貴族の権威を縮減すること、自治都市と自治州の特権を剝奪すること、国家に所属するきわめて偉大な個人と上流の身分団体をもろともに、非力で卑小きわまりない個人や団体同然に、命令に楯突けなくすることです。

第三章　あまねく万人の幸福をねがう心について

1　わたしたちがほどこす善行は、祖国を越えて広い範囲の社会に効果を及ぼすことはまずありません。しかし、わたしたちの善意は、いかなる境界線によっても制限されることなく広大な宇宙を包みこむことができます。わたしたちは、感受能力がある無辜の存在者を思い描けば、その幸福を願わずにはいられませんし、また、その不幸を克明に心に描き出せば、いささかなりとも嫌悪せずにはいられません。

たしかに、感受能力があるのに危害を加える存在者といった観念をいだけば、自然に憎しみが噴出します。しかし、この場合にその存在者に対してもつ敵意は、じつは、あまねく万人の幸福をねがう心から生じる結果です。つまり、この存在者の悪意によって、感受能力があるほかの無辜の存在者は幸福を妨害されるわけで、わたしたちは彼らの不幸と憤りに共感し、その結果として敵意が生じるのです。

2　このあまねく万人の幸福をねがう心が、どんなに気高く・高潔無私であろうとも、それがゆるぎない幸福の源泉たりうるには、以下のような信念が堅持されなければなりません。すなわち、「宇宙の住人はすべて、どんなに卑しい人も、どんなに上流身分の人も、あの偉大で・他者の幸福をねがう・すべてお見通しの存在者が直接おこなう世話と保護を受けている。この存在者は、自然のあらゆる運動を指導し、みずからのもつ不朽の完成された技術によって、可能な最大量の幸福を宇宙のなかにいかなるときも保全しようと決意している。」

三五

このあまねく万人の幸福をねがう心の対極にあるのは、世界に創造主はいないのではないかという疑いであり、これこそまさしく、あらゆる省察のなかでも一番心をしぼませるもので、それは、「無限・無辺に広がる未知の辺境は、すべてが、ただ果てしない不幸と惨状に埋め尽くされているだけかもしれぬ」という考えから芽生えるにちがいありません。このまことおぞましい観念は、きっと想像力を暗闇で覆うにちがいなく、それを明るくすることは、どんなにすばらしい順境の華やかさにもまったくできません。知恵と美徳の持ちぬしには、これと正反対の学問体系こそ真理であるという信念がしっかり身についていますから、その胸にはきっと歓びが湧き、それを枯らすことは、どんなに人を打ちひしぐ逆境の悲しみにもまったくできません。

3　知恵と美徳の持ちぬしはいかなるときも、「わが身ひとりの私的な利益は、自分が所属する特定の身分団体や社会集団の公的な利益のために犠牲にされるべきだ」と覚悟しています。また、彼はいかなるときも、「この団体や集団は、国家・主権の従属的な部分にすぎないのだから、団体や集団の利益は、国家・主権のもっと重大な利益のために犠牲にされるべきだ」と覚悟しています。

ですから、彼は同じく、「そんな下級の利益は、そのすべてが宇宙のもっと重大な利益のために――感受能力と知情意をそなえるすべての存在者を構成員とし、神自身が直接の運営者で指導者でもある偉大な社会の利益のために――犠牲にされるべきだ」と覚悟しているでしょう。「他者の幸福をねがい・すべてを見通すこの存在者は、普遍的な善に必要でなければ、その統治システムのなかに局所的な悪の介在を許容するはずがない」という信念がしっかり身について彼の心に深く刻印されていれば、どんな非運が自分自身、友人、社会集団、祖国に降りかかろうと、彼は、そのすべてを宇宙の順境に必要なものとみなすにちがいなく、したがって、その非運はあきらめて甘んじるべきことであるばかりか、事物がおりなす提携・依存の連関を知り尽くしていたら自分でも誠実・敬虔に願っていたことである、とみなすにちがいありません。

4　また、こうして宇宙の偉大な指導者の意思にいさぎよく従う諦念は、およそ人間の自然本性に及びもつかない境地であるとは思われません。

よい兵士は、その将官を愛し信頼もして、生還する見込みのない最果ての基地におもむきますが、しばしばその行軍の様子は、

困難も危険もない基地におもむく場合より、にぎやかでてきぱきとしています。危険のない基地に向かって行軍するとき、彼らは、通常の義務からくる退屈な感情しかもてないとしても、生還する見込みのない基地に向かって行軍するときは、人間に可能な最大限の気高い力を発揮していると感じます。彼らは、軍の安全や戦争の勝利に必要でなければ上官がこの基地への着任を命じなかったことを知っており、自己の小さなシステムをもっと大きなシステムの順境のために欣然として犠牲にします。彼らは、同志から愛情こまやかな別れのあいさつを受け、同志の幸福と勝利をどこまでも願いつつ、死が待ち受け、しかし華々しく誇らしい任地に向けて行軍を開始しますが、そのとき、命令に従容と服すばかりか、しばしば無上の歓びに満ちた得意満面の雄叫びをあげます。

軍の司令官がかぎりない信頼と熱烈・熱狂的な親愛に値するとしても、それは、宇宙の偉大な司令官には及ぶべくもありません。公私を問わずどんなひどい災厄においても、知恵ある人ならば、「自分自身、自分の友人、また、同郷人だけが、宇宙の最果ての基地に着任を命じられた。全体の善に必要でなかったら、自分たちにそんな命令は出されなかっただろう。だから、自分たちの義務は、謙虚な諦念を胸にこの任務に服することだけでなく、てきぱきと喜んでこの任務に就こうと努力することである。」と考えるはずです。知恵ある人ならば、よい兵士がいついかなるときも喜んでおこなおうと覚悟を決めることをきっと実行できるはずです。

5　「神とあがめられる存在者は、他者の幸せをねがう心と知恵によって、いつとも知れぬ昔から、宇宙という巨大な機械仕掛けをしつらえて司令し、いかなるときも、可能な最大量の幸福を生み出そうとしてきた」。――このような観念は、人間の思索が対象にするもっとも崇高なもので、他の追随をゆるさないのは確かです。これに比べれば、ほかの思想はどうしても卑小に映ります。

もっぱらこの崇高な思索に専念していると考えられる人は、ほぼ例外なく、きわめて恭しくたてまつられる対象です。彼の生活が、観想一色であるとしても、彼をみるわたしたちの目には、しばしば一種の宗教的尊敬がこもり、それは、どんなに活動的で役に立つコモンウェルスの献身者をみる場合より、ずっと格上の尊敬です。マルクス・アントニヌスの『省察』[29]は、おもにこの主題

(29) Marcus Aurelius (121-80 AD) は、一六一年、ローマ皇帝になり、Antoninus を自分の名に追加した。彼のストア哲学作品 *Meditations* は生涯の最後の一〇年間に書かれ、死後に出版された。

を扱っていますが、彼の人柄が広く賞賛されてきたのは、おそらくこの書物のおかげであって、心正しく・慈悲にあふれ・恵み深い彼の治政のさまざまな業績をすべて集めてもそれに及びません。

6　しかし、宇宙という偉大なシステムを運営すること、すなわち、理性と感受能力をもつ存在者がすべてあまねく幸福であるように世話をすることは、神の仕事であって、人間の仕事ではありません。

人間に割り当てられているのは、はるかにつつましい領分ですが、それは、人間の諸力が貧弱であり、人間の理解力が狭隘であるという事実に大いにふさわしいものです。その領分とは、自分自身の幸福の世話、自分の家族、友人、祖国の幸福の世話です。「もっと崇高な思索に専念している」と言ったところで、それよりつつましい領分の責任を果たさない言い分ににけっしてなりえません。アウィディウス・カッシウスは、マルクス・アントニヌスに対して、おそらく不当にも、「彼は、学問的思索に従事し、宇宙の順境に思いをめぐらせながら、ローマ帝国の順境には責任を果たしていない」と問責したといわれますが、[30] 人はそんなふうに責められる言動をしてはなりません。観想にふける哲学者の思索がどんなに崇高であろうと、行動の義務を怠れば、それがどんなに小さな義務でも埋め合わせることはほとんどできません。

セクションⅢ　自制心について

1　完全な予見注意力、厳格な正義、適切に他人の幸福をねがう心、こうした美徳の準則に従って行動する人は、完全な美徳の持ちぬしということができましょう。しかし、そんな準則についてどんなに完全な知識があっても、それだけではそんなふうに行動することはできますまい。胸の情念は、彼をときには駆りたて、ときにはそそのかして、ややもすると彼を惑わし誤らせるきらいが強く、そのせいで彼は、心静かで冷静なときにはつねに自分でも是認する準則をことごとく踏みにじります。人はどんなに完全な知識をもっていても、それが万全の自制心に支えられなければ、義務をつねに実行できるとはかぎりません。

2　上のような情念は、古代のもっともすぐれた道徳学者の幾人かによると、ふたつの異なる種類に区分されると考えられたように思われます。その第一の種類は、一瞬であってもそれを押しころすのに相当な自制心をふるわなければならない情念です。第二の種類は、一瞬ならば、あるいはもう少し長い時間であっても、容易に押しころすことができ、にもかかわらず、それは絶えずほとんどのべつ幕なしに甘言をささやいて、わたしたちが人生を送るうちにややもすると本道から大きくそれた脇道に迷いこませるきらいが強くあります。

3　恐怖と怒気、また、これらと混じり合い結合するほかの情念は、上の第一の種類に分類されます。くつろぎ・楽しみ・喝采への欲求、その他、私事にかまける感情を充足させたがる多くの欲求は、第二の種類に分類されます。野放図な恐怖、燃えあがる怒気は、一瞬であっても押しころすことが往々むずかしいものです。くつろぎ・楽しみ・喝采への欲求、その他、私事にかまける感情を充足させたがる欲求は、一瞬ならば、あるいはもう少し長い時間であっても、つねに容易に押しころすことができ、にもかかわらず、この種の情念は絶え間なく甘言をささやいて、しばしばわたしたちを惑わしあざむき、あとから思うと恥ずべき理由が相当にある浅はかな行いをたびたびさせます。よくする言いかたでは、第一の種類の情念は、わたしたちを「駆りたて」、第二の種類の情念は、「そそのかして」、義務から遠ざけます。上で言及した古代の道徳学者によると、前者の種類の情念を制御する力は、勇猛、男らしさ、心の強靱さと呼ばれ、後者の種類の情念を制御する力は、節制、節度、慎み、謙抑と呼ばれました。

4　上の二種類の情念をそれぞれ制御する力は、予見注意力、正義、他人の幸せをねがう適切な心の指令に従って行動する力をいつでも授け、その意味で［手段として］役に立ち、そこから引き出される美しさをもちますが、さらに、そんな美しさには依存し

(30)　スミスが言及しているのは、*Historia Augusta*（おそらく四世紀後半の書）。本書は、一一七年から二八四年までの皇帝および権力簒奪者の伝記を集めたもので、おびただしい数のねつ造された手紙やその他の文書を含む。ここで参照される本物と称される手紙は、「アウィディウス・カッシウスの生涯」（一七五年に死去）の項にある。カッシウスは、ローマ帝国東部のローマ軍を指揮する反政府的な将官で、みずからを皇帝であると宣言していたが、まもなく暗殺された。

三九

ない、それ自身に由来する美しさをもち、それ自身の価値ゆえに、しかるべき敬意と賞賛に値するように思われます。第一の種類の情念を制御するときふるわれる力は、力強く、堂々としているので、また、第二の種類の情念を制御するときふるわれる力は、一糸乱れず、むらがなく、ねばり強く身じろぎしないので、それ自身に由来する敬意と賞賛の念をいささかなりとも掻きたてます。

5　危地に陥り、拷問にあって死が迫るのに、心穏やかさを崩さず保ち、どんなによそよそしい観察者の心情にも完全に添う言動でなければ、うかつに吐露しない――そんな人は、とても高い賞賛をきっと勝ちえます。彼が、情け深く祖国を愛する一心から、自由と正義を大義として苦難を引き受けるならば、その苦しみを案ずるこよなく心やさしいいたわり、彼の迫害者の不正義にぶつけるこの上なく強い怒り、彼の恵み深い意図によせるこよなく温かな感謝の共感感情、彼の功労をどこまでも高く評価する感賞、こうしたものがことごとくあいまって彼の豪胆への賞賛と混じり合い、しばしばこの賞賛の感情を燃えたぎらせ、とてつもなく熱狂・狂喜する崇拝にします。

古代や近代の歴史に出てくる英雄で、ひときわ格別な好意と親しみをこめて思い出される人たちがいますが、その多くは、真理・自由・正義といった大義のために刑場の露と消え、しかもその場で彼らにふさわしく平然と威厳を保った人たちです。ソクラテスの敵対者たちが、静かな天寿の全うを彼にゆるしていたならば、後世のだれの目もくらました華々しいこの偉大な哲学者の栄光でさえ、おそらくそんなに輝きはしなかったでしょう。

イングランドの歴史でも、ヴァーチューとハウブラーケンの版画集に描かれた偉人の肖像を通覧すると、だれもが知るいくつかの肖像の下には、斬首されたことを象徴する斧が彫られています。この図柄は、サー・トマス・モア、ローリー、ラッセル、シドニーなどと同じ運命をたどった人びとの肖像に付けられていますが、画中の人物に真の威厳と深い味わいをかもしており、ときに添えられる紋章学の不毛な装飾をかき集めても、これほどの効果を引き出すことはとてもできまい――そう感じない人はまずいないとわたしは想像します[31]。

6　こんな豪胆によって人柄がきらめくのは、無辜の有徳な人たちにかぎりません。途方もなく重い罪を犯した人物でさえ、豪胆

であることによってその人柄に多少の好意的な関心を引きよせます。強盗や追いはぎが処刑台に引っ立てられ、そこで節度を保ち不撓不屈の態度でふるまえば、わたしたちはその処罰を完全に是認しつつも、そんな立派で気高い能力をもつ人でも、あんな卑劣な凶悪事件を起こす定めの素質であったことに、しばしば残念だという思いを禁じえません。

7　戦争は、この種の豪胆を身につけ・行使することを学ぶ偉大な学校です。わたしたちがふだん言うように、死は数ある脅威のなかの王であり、死の恐怖に打ち勝った人は、ほかのどんな自然的悪が迫ろうとも肝をつぶしにくいものです。

人びとは戦争をしていると死に慣れっこになり、それとあいまって、気弱で経験の浅い人が死をながめていだく迷信的なおののきはきっと解消されます。人びとは、「死が生の喪失にすぎない」、「生が欲望の対象であることに理由はないのと同様、死が嫌悪の対象であることにも理由はない」と考えます。さらに、人びとは経験から、一見ひどい危険とみえる多くのことが、見かけほどひどくないことを知り、また、勇気・行動力・度胸があれば、最初は希望の見えない境遇でも、そこから脱けだして面目をほどこす確率はしばしば相当高いことを学びます。

こんなふうに死のおぞましさは大幅に縮小し、死を免れる確信や希望は増大します。彼らは、さほど躊躇せずにわが身を危険にさらすことができるようになります。彼らは、危険から逃れようとさほど一喜一憂せず、危険のただなかでもなかなか肝をつぶしません。このように死と危険を軽蔑する態度が習慣として身につくからこそ、兵士という職業は気高いものとされ、ほかのどんな職業にもまさる地位と威厳を授けられる、と世人は自然に理解します。この職業を国務として手ぎわよく・首尾よく遂行することは、人びとからいつの時代も愛される英雄の人柄に、ひときわ目立つ特色であったように思われます。

(31) Thomas Birch, *The Heads of Illustrious Persons of Great Britain, engraven by Mr Houbraken, and Mr Vertue. With their Lives and Characters* (1743) を見よ。列挙されている人物はすべて処刑された。Sir Thomas More (1478-1535) は大逆罪、Sir Walter Raleigh (1552-1618) は、ジェイムズ一世を狙った共同謀議、William, Lord Russell (1639-83) および Algernon Sidney (1622？-83) は、大逆罪（ライ・ハウス陰謀事件）による。

8　偉大な軍功は、正義の原理にことごとく違反して企てられ、思いやりのかけらもなく実行されるとしても、わたしたちの関心を引きつけることがあり、その実行者がずいぶんとりえのない人柄でも、ある程度ならしかるべき種類の敬意さえ勝ちえます。わたしたちの関心は、海賊の武勲にさえも引きつけられ、[32] また、どんなにとりえのない人物伝を読むときでも、彼らが極悪非道の目的を求める途上、耐えた試練、克服した困難、遭遇した危険が、通常継起する歴史によっては説明がつかないほどすさまじいものならば、ある種の敬意と賞賛の念が湧いてきます。

9　怒気を制御することは、恐怖心を制御することに劣らず、高潔無私で気高く映る場合が多いものです。正当な怒りの適切な表現は、きわめて華麗で賞賛される多くの文章となって、古代と近代の巧みな弁舌からつむぎ出されています。デモステネスがマケドニアのフィリッポスへの抵抗を呼びかけた演説にしても、[33] キケロがカティリーナの陰謀を告発した演説にしても、その美しさはことごとく、正当な怒りが表現されるときの気高い適切さから引き出されています。しかし、この正当な怒りは、公平な観察者が歩調を合わせられる程度にまで押しころされ・適切に鎮静化された怒気にほかなりません。この限度を超えて怒鳴るやかましい情念は、いつだって毛ぎらいされ、神経を逆なでし、わたしたちの関心を、怒っている人でなく怒られている人のほうに引きつけます。

たとえどんなに完全な適切さで憤りを発するとしても、多くの場合、罪を赦すことの気高さにはかないません。加害者側から適切に引責が申し出られた場合に、あるいはそんな申し出はなくとも、公衆の利益に鑑みればどんなに憎みあう敵同士でもぜひ連帯して果たさねばならない重要な義務がある場合に、敵愾心を残らず捨て切れる人、そして自分にどれほど重大な侵害を加えた相手にも信頼と友好の態度をとれる人は、いみじくも最高の賞賛によって報われるべき功労があると思われます。

10　一方、怒気を制御することは、必ずしもそんな華麗な様相に映るわけではありません。怒っていても本心は怖がっていて、恐怖心が怒気を押しころす動機であることはよくあります。そんな場合、動機が卑小なので、怒気を押しころしても気高さはすっかり失われています。

怒気は人を攻撃に向かわせるので、怒気に身をまかせることは、一種の勇気を見せ、恐怖に対する優位を示すように思われることがあります。また、怒気に身をまかせることは、見栄の目標であることもあります。恐怖に身をまかせることが見栄の目標であることはけっしてありません。見栄っぱりで気弱な人は、自分よりも下級の人やことさら楯突こうとしない人が周囲にいると、粋がってすぐけしからんと大げさに短気をひけらかすことがよくありますが、彼らは短気であることがいわゆる気骨を示すと一人合点します。やくざものは、いばりたい一心で、ありもしない話をたくさんし、そんな話で自分が前よりもいつくしまれたり仰ぎ見られたりはしないにせよ、少なくとも、手ごわい印象を聞き手に与えると想像します。

当世の気風は、決闘の慣行に好意的であり、その点で、私人による仕返しを奨励するといってよい場合もあります。[34] おそらく、そんな気風が追い風になって、恐怖心から怒気を押しころすことを軽蔑する風潮が近ごろずいぶん強まっていますが、そんな気風がなければ、それはずっと軽蔑に値しないことに映るでしょう。恐怖心を制御することは、その根底にある動機がなんであっても、つねにどこか厳かな感じがします。怒気を制御することは、そうではありません。それは、ことごとく節度・威厳・適切さの感覚に根ざしていなければ、けっして完全に心地よいわけではありません。

11　予見注意力、正義、適切な恵み深さの指令を守って行動しても、それに背いて行動したいという誘惑がない場合には、大して功労はないと思われます。

一方、果てしもない危険や困難のただなかにあって冷静に秤量して行動すること、また、莫大な利益の誘惑と甚大な権利侵害の挑発が、正義の準則に背かせようとするにもかかわらず、宗教的厳粛さをもってこの神聖な準則を守ること、その幸せを願ってきた相手から悪態をつかれ感謝もされないが、だからといって他人の幸福をねがう気構えをしぼませたり、くじけさせたりしないこ

(32)　一七、一八世紀において海賊は事実上も文学上も身近な事象であった。

(33)　アテネの政治家 Demosthenes（384-322 BC）は、Philip II of Macedon に対抗して四つの演説をおこなった。また、キケロは、Lucius Sergius Catilina（62 BC 死去）に対抗して四つの演説をおこない、紀元前六三年にカティリーナによる革命の計画を暴露した。

(34)　*LJ* (A) ii.136-9 を参照。決闘は、一八世紀には珍しくなく、道徳学者が上流階層の気風を批判するときよく取り上げる題材であった。

と、以上は、きわめて高貴な知恵と美徳がある人柄です。

自制心は、それ自体が偉大な美徳であるばかりか、ほかのすべての美徳が主要な輝きを引き出す源泉であると思われます。

12　恐怖心を制御する力と、怒気を制御する力は、いつでも偉大で気高いものです。これらの力は、正義と、他人の幸せをねがう心によって指揮されるとき、［それ自体が］偉大な美徳であるばかりか、正義のようなほかの美徳の華やかさを増幅します。

けれども、これらの能力は、ずいぶん違う動機によって発揮されることがあり、そんな場合、相変わらず偉大で仰ぎ見られるとしても、はなはだ危険であるかもしれません。むやみに向こう見ずな武勇が、途方もない不正義を大義として用いられることはありえます。ひどく腹立たしい扱いを受けているさなか、うわべは穏やかで機嫌がよくても、仕返ししてやろうという不退転の残酷きわまりない決意が秘められているかもしれません。

しかし、このように本心を偽装するために欠かせない心の強さは、いつでもきっと虚言の悪質さに汚染されるにもかかわらず、侮りがたい分別をもつ多くの人からしばしば激賞されてきました。この本心を偽装する能力は、あちこちで特筆され、メディチのカトリーヌの場合は、深遠な歴史家ダヴィラによって、ディグビィ卿、のちのブリストル伯の場合は、重厚で目配りがきくクラレンダン卿によって、初代シャフツベリ伯の場合は、怜悧なロック氏によって、それぞれ称えられています。[35] キケロですら、人目をあざむくこの人柄について、さすがに最高の威厳があるとは考えませんが、気風をしかるべく変えてみせる臨機の才には不似合いではない、と考えるように思われます。そんな臨機応変の才は、欺瞞的であるにもかかわらず、全体としては心地よくもあり、尊重されるべきでもあるというのが彼の考えでした。キケロはこの点を例証するために、ホメロスのユリッセウス、アテネのテミストクレス、スパルタのリュサンドロス、ローマのマルクス・クラッススを引き合いに出します。[36]

偽装によって闇の奥に本心を隠すこうした人柄は、公共の秩序が大いに乱れる時代、党争や内戦のただなかではごくふつうに出現します。法がはなはだしく無力になったとき、また、どんなに完全な潔白もそれだけでは安全を保証できないとき、たいていの人は、自己防衛への配慮から、当座を席巻する一党が何者であろうと、彼らに対して如才なく応じたり、陳情したり、表向きの折り合いをつけたりせずにはいられません。さらに、人目をあざむくこの人柄には、大抵、きわめて冷静で不退転の勇気が伴います。

通常、露見すれば確実に死という結果が生ずるので、この人柄を適切に演じるには、そんな勇気がなければなりません。この人柄は、反目する党派に燃えさかる敵愾心のせいで、いやおうなく人びとの装いとなり、なに食わぬ顔で演じられて、党派間の敵愾心を沸きたたせたり鎮めたりします。この人柄は、ときには有益でも、少なくとも同じくらい、劇しい毒になる危険性があります。

13　さほど激しくも煩わしくもない情念を制御する力は、有害な目的に濫用される危険はずっと低いように思われます。節制、節度、慎み、謙抑は、つねにいつくしまれる美徳であり、邪悪な目的にふるわれることはまずありません。

貞節はいつくしまれる美徳として、勤勉と質素は仰ぎ見られる美徳として、それぞれ物静かな輝きをかもしますが、その輝きのすべては、自制心をそのようになるべく穏やかに発揮する・ねばり強く身じろがない態度から引き出されます。無官の平穏な私生活のつつましい道を満足して歩む人はみな、美しく上品なふるまいをしますが、その美しさと気品の大半は、先と同じ原理から引き出されます。その美しさと気品は、英雄、政治家、立法者のひときわ華やかな行動にまとわるものより、まぶしさではずっと劣るにしても、こころよさで劣るとはかぎりません。

14　すでに自制心の自然本性については、本論の所々で述べてきましたから、以後の議論でその種の美徳にことさら詳しく立ち入る必要はないとわたしは判断します。ただ、ここでわたしは、つぎのことを考察したいと思っています。それは、情念の適切さの水準、つまり、公平な観察者が是認する情念の程度は、情念の違いに応じてそれぞれ定まっているということです[I. ii. intro. 1-2]。

ある種の情念は、不足しているより、強すぎるほうがまだしも不快ではありません。こんな情念において、適切さの水準は、高い、つまり、不足した状態よりもあふれ出る状態に近いと思われます。別の種類の情念は、強すぎるより、不足しているほうがま

(35) Enrico Caterino Davila, *Historia delle guerre civili di Francia* (1630); Edward Hyde, 1st Earl of Clarendon, *History of the Rebellion and Civil Wars in England* (1702-4); John Locke, 'Memoirs relating to the life of Anthony, first Earl of Shaftesbury', *Posthumous Works* (1706) 初出。

(36) Cicero, *De officiis*, I. xxx. 107-9 (Themistocles, Marcus Crassus & Lysander) および III. xxvi. 97 (Ulysses).

四五

だしも不快ではありません。こんな情念において、適切さの水準は、低い、つまり、あふれ出る状態よりも不足した状態に近いと思われます。前者は、観察者が共感する気にきわめてなりやすい情念であり、後者は、観察者が共感する気にきわめてなりにくい情念です。また、主たる当事者の直接的な心情・感懐としては、前者の情念は心地よく、後者の情念は不快です。

一般的準則として以下のことを明記することができます。それは、「観察者が共感する気にきわめてなりやすく、それゆえに、適切さの水準が高いといえる情念は、主たる当事者の直接的な心情・感懐としては、だいたい心地よい。逆に、観察者が共感する気にきわめてなりにくく、それゆえに、適切さの水準が低いといえる情念は、主たる当事者の直接的な心情・感懐としては、だいたい不快であり、苦痛ですらある。」というものです。この一般的準則は、これまでわたしが考察してきた事実に照らすかぎり、ひとつの例外もゆるしません。二、三の例をあげれば、すぐにこの準則は十全に説明され、真理であることが証明されるでしょう。

15　人びとを結びつけて社会をつくろうと指向する心の動きには、情け深さ、親切心、肉親の愛、友情、敬意があり、こんな感情をついもってしまう習性が過剰な例はときに見られます。しかし、この心理的習性の持ちぬしは、それが過剰な場合でも、みなから関心をよせられます。わたしたちはそんな過剰を非難しますが、それでもまなざしにはいたわりがあり、親切心さえこもるのであって、嫌悪の目でみることはけっしてありません。わたしたちはそれに腹を立てるよりも、気の毒だと思います。一方、この心理的習性をもつ本人にしてみれば、そんな心の過剰な動きにひたるとしても、多くの場合、それは心地よいばかりか、甘露のごときものです。

たしかに、こんな感情がそれに値しない対象に過剰に注がれることは珍しくもありませんが、特にそんな場合、この人は、ずいぶん切実で痛切な辛酸に直面することがあります。しかし、そんな場合でも、円満な気性の人ならば、身につまされ・きわめて鋭敏な感じをもって彼をみる一方、彼を気弱で目先が利かないといって訳知り顔に見くだす人たちに、きわめて強い怒りを覚えます[I. ii. 4. 3]。

逆に、この心理的習性の不足、いわゆる薄情のせいで、人は、他人の心情と辛酸に無神経になり、一方、他人も、同じように彼の心情と辛酸に無神経になり、こうしてそんな人は世間からことごとく仲間はずれにされ、社交を通じて味わえる最高の楽しみ、

心がもっとも憩う楽しみから締め出されます。

16　人びとを駆りたててお互いから引き離す、いうなれば、人間社会のきずなを断ち切ろうと指向する心の動きには、怒気、憎しみ、嫉妬心、悪意、復讐心があり、こんな感情をついもってしまう習性は、先に述べたのとは反対に、ややもすると不足するより過剰なせいで神経を逆なでするきらいが強くあります。この心理的習性が過剰な人は、自身の心には無残な情けない姿で映し出され、他人の目には、憎らしく、ときにはぞっとする対象に映ります。

この心理的習性が不足していても苦情を述べられることはまずありません。しかし、その不足は、欠点になりえます。適切な怒りを欠くことは、男らしい人柄において致命的な欠点であり、そのせいでわが身や友人を誹謗・不正義から守れなくなる場合も多いのです。いわんや、怒りが過剰に不適切な方面にふるわれて、毛ぎらいされ・いとわしい情念の嫉妬心を形成すると、なおさら欠点になります。

嫉妬心とは、人の占める優位がすべて正真正銘の権原に基づくのに、それをいじわるい嫌悪のまなざしでながめる情念です。しかし、重要な事項について、他人がそんな権原をもたないのに、自分より昇進したり先に手柄をたてたりするのをおとなしく許す人は、意気地なしとこき下ろされて当然です。この気弱さは、ふつう怠け心に根ざし、ときには、根っからのお人よしや、対立を避けたい、あくせく立ち回って自分を売りこむのはいやだという気持ちに根ざし、さらに、早合点の豪胆とでもいえるものに根ざすこともあります。この種の豪胆は、当座に見下す相手の優勢がそれ以後もずっと見下しつづけられるものと勝手に思い込み、それゆえ、いとも簡単に譲歩します。しかし、そんな気弱さのあとにふつう続くのは、深い後悔と悔悟です。当初はどこか豪胆の外見をしていたものが、最後には、きわめていじわるい嫉妬心に取って代わられ、そんな優位を憎むようになります。けれども、いったん優位を手に入れた人たちは、まさしくその入手にまつわる事情によって、その優位に対する正真正銘の権原者になれる場合が多いのです。

世間で居心地よく暮らしていくには、いついかなるときも、威厳と地位身分を守ることが、生命や財貨を守ることと同じく欠かせません。

四七

17　面と向かう危険や辛酸を感受する能力は、面と向かう腹立たしい扱いを感受する能力にも似て、不足するよりも過剰なせいで神経を逆なでするきらいが強くあります。

臆病者の人柄ほど軽蔑すべきものはなく、一方、向こう見ずに死と向きあい、どんなにおぞましい危険のただなかでも心穏やかさと度胸を失わない人の人柄ほど賞賛されるものはありません。わたしたちは、苦痛、そして拷問にさえも、男らしさと不撓不屈をもって耐え忍ぶ人に敬意をいだき、一方、苦痛や拷問にへこたれ、無用の叫び声や女々しい泣き言に身をまかせる人にはほとんど見向きもしません。

心配性の人は、感受能力が過敏で、煩瑣な事件をいちいち感じ、そんな気性のせいで、本人はみじめな気分になり、他人は神経を逆なでされます。一方、泰然とした人は、人間がふつうに暮らしていれば付いてまわる些細な権利侵害や災いに心穏やかさを邪魔させず、世間に巣食う自然的悪や道徳的悪のただなかで覚悟を決めていささか苦しむもよしとしますが、こんな気性は、本人には天恵であり、その仲間みんなにはくつろぎと安心を与えます。

18　しかし、わたしたちがわが身にこうむる権利侵害と非運を感受する能力は、概して強すぎるものですが、同様に、弱すぎる場合だってあります。わが身の非運を案じてほとんど何も感じない人は、いつだって他人の非運をさほど感じることはなく、他人の気持ちを紛らわしてやろうという気にさほどならないにちがいありません。わが身に加えられる権利侵害にほとんど憤りをいだかない人は、いつだって他人に加えられる権利侵害にさほど憤りをいだかず、他人を守ってやりたいとか、かたきを討ってやりたいという気にさほどならないにちがいありません。

人生に継起する出来事をぼんやりと無神経にやりすごしていると、自分のふるまいが適切かどうかを注意する・熱心で真摯な心――これこそ美徳の真の本質です――は、きっと残らず消えうせます。わたしたちは、自分の行為から出来する結末に無関心であれば、その行為の適切さに一喜一憂することはほとんどありえません。

人が自分に降りかかった災厄のつらさを余さず感じ、自分に加えられた不正義の悪質さをまるごと感じ、しかし同時に、それよりも自己の人柄の威厳が要求するところを一段と強く感じ、そして、そんな境遇にあれば自然に高ぶってもおかしくない・度しが

たい情念のいいなりにならず、胸中の偉大な同行者・偉大な半人半神の規範と是認によって押しころされ・矯正された情動に従い、自分の態度・ふるまい全体を統制するならば、そのような人だけが、本当に有徳な人であり、愛情・尊敬・賞賛を注がれる唯一の真正で適切な対象です。

気高い不撓不屈と高貴な自制心は、威厳と適切さの感覚に根ざし、鈍感な神経とは似ても似つかず、多くの場合、鈍感な神経が幅を利かせると、そのぶん、自制心の功労はすっかり奪われます。

19　しかしです。面と向かう権利侵害や面と向かう危険・辛酸に対して、感受能力が完全に欠落していれば、そんな境遇で自制心を示しても、功労はすべて帳消しになるでしょうが、それにしても、そんな場合に感受能力は、いとも簡単に鋭敏になりすぎ、事実、そういうことはよくあります。

適切さの感覚、つまり、胸中の裁判官の権威が、この極度に鋭敏な感受能力を制御できるとき、たしかにその権威はとても気高く、とても偉大に映るにちがいありません。しかし、この権威をふるうことは、精根尽き果てる仕事であって、なすべきことが多すぎます。懸命に努力して、非の打ちどころなく上手にふるまえる個人はいるかもしれません。ですが、ふたつの原理［鋭敏な感受能力と適切さの感覚］の競り合い、胸中のせめぎ合いは、あまりにも激しく、内心の穏やかさ・幸福とはまったく相容れません。

人がこのように鋭敏すぎる感受能力を自然から授かり、そのあまりにもなまなましい心情が幼少期の教育や適切な訓練によって十分には鈍麻・硬化していないとすればどうでしょうか。そんな場合でも、彼に知恵があれば、義務と適切さの許すかぎり、自分に完全には適さない境遇を避けるでしょう。虚弱で繊細な体質のせいで、苦痛・試練・あらゆる種類の肉体的辛さに過敏な人は、みだりに兵士を職業にしてはなりません。権利侵害に過敏な神経をもつ人は、性急に党派の抗争に首を突っこんではなりません。

適切さの感覚が、そんな過敏な感受能力をすべて統制するだけの力強さをもつ場合でも、心の落ち着きは、その奮闘でいつも妨げられるにちがいありません。こうして心がかき乱されると、判断力はふだんの厳密さ・精緻さを保てるとはかぎりません。すると、適切に行動しようとつねに心がけていても、しばしば、性急で目先が利かず不注意に行動して、自分でもその後の人生でいつまでも恥じる体たらくであるかもしれません。

四九

生得であれ、後天的であれ、しかるべき向こう見ず、しかるべき図太い神経・辛抱強い性格は、およそ自制心を堂々と発揮するためには、確かにそなえておくべき最適の条件です。

20　なるほど、戦争と党争は、万人をこんなに辛抱強く図太い気性の持ちぬしに仕立て上げる最適の学校ですし、その対極にある気弱さを取り除く最適の治療法ですけれども、しかし、その学校の課程を修了する前に、また、その治療法の適切な効果が出る前に、試練の時が期せずして到来するならば、その結果は芳しくないかもしれません。

21　人生にある楽しみや娯楽・享楽に対する感受能力も、先と同様、過剰であったり不足していたりするせいで、神経を逆なでします。しかし、これらふたつの場合のうち、不足するよりも過剰であるほうがまだしも不快でないように思われます。

観察者にとっても、主たる当事者にとっても、歓びを求める強い性向は、娯楽や気晴らしの対象に鈍感な無神経より、たしかに喜ばしいものです。わたしたちは、青年期のにぎわいや、幼年期のわんぱく盛りにさえ魅了されますが、一方、老年期にしょっちゅうつきまとう平板で無味乾燥な謹厳には、すぐうんざりします。

たしかに、歓びを求めるこの性向が、適切さの感覚によって押しころされなかったり、時宜に適わず・場違いで、その人の年齢・境遇に似つかわしくなかったり、彼がこの性向にひたる場合でも自分の利益や義務をかえりみなかったりすれば、この性向は強すぎて本人にもその所属集団にも有害である、と非難されて当然です。しかし、そんな状況の大半でもっぱら欠点と認められるべきは、歓びを求める性向が強いことであるより、むしろ、適切さと義務の感覚が弱いことです。

若者がその年ごろに自然で似つかわしい気晴らしや娯楽になんの興味ももたず、書物や仕事の話ばかりするならば、彼は堅苦しく学者気どりだとして嫌われます。そして、わたしたちは、彼の禁欲が、たとえ不適切な耽溺を断つものであっても、それを功績とは認めません。なぜなら、彼には、そんな耽溺への欲求がほとんどないと思われるからです。

22　自己評価の原理は、強すぎることもあれば、同様に弱すぎることもあります。自己を高く評価することは、まことにずいぶん

心地よく、自己を低く評価することは、まことにずいぶん心地悪く、ですから、評価する当人からすると、「過小評価するぐらいなら少しぐらい過大評価するほうがまだしもずっと不快でないにきまっている」ということだけは、疑いようがありません。一方、公平な観察者の目からみると、事態はかなり違ったふうに映るにちがいありません。つまり、「いつだって過大評価よりも過小評価のほうがまだしもずっと不快でないにきまっている」と、おそらく観察者には思われるでしょう。

ところで、仲間が自己評価をする場合、わたしたちは、たしかに、彼らの過小評価よりも過大評価に苦情を述べるほうがずっと多いものです。仲間がわたしたちに対して僭越な態度をとったり、わが身を優先したりするならば、彼らの自己評価は、わたしたち自身のそれを滅入らせます。わたしたちは、わが胸の高慢と見栄に衝き動かされて、彼らを高慢ちき、見栄っぱりだといって告発し、彼らのふるまいの公平な観察者であることをやめます。

しかし、この同じ仲間をさしおいて別のだれかが自分のものでない優位を僭称するのに、仲間がそれをおとなしく許すならば、わたしたちは仲間を非難するばかりか、しばしば意気地がないといって見下します。逆に、仲間がほかの人びとのあいだで少し強く自分を売りこんで、その功労への報いとしては不相応だと思われる昇進を奪いあう場合、わたしたちは、彼らのふるまいを完全に是認することはなくても、大抵、それをみれば総じて愉快な気分になります。要するに、その場合に嫉妬心がなければ、わたしたちはほとんどいつだって、彼らをさほど不快に思わず、むしろ、彼らが自分にふさわしい地位身分よりも低いところに黙って沈淪していたら、そのほうがよほど不快に思ったはずです。

23　自己の功労を評価したり、自己の人柄とふるまいについて判定したりする場合、ふたつの異なる基準があり、わたしたちは自然にこれらと照合してそんな評価・判定を下します[37]。

第一の基準は、わたしたち各自の理解能力が及ぶかぎりでの、正確な適切さと完成を表す観念です。第二の基準は、この観念の近似値であり、ふだん世間で達成される程度のもので、わたしたちの友人や仲間、また、敵対者や競争相手の大半が実際に到達で

(37)　前出 I. i. 5-9 参照。

きたとしてもおかしくない水準です。

わたしたちは、自分自身について判定を下そうとすれば、ほとんど必ず（きっと必ず、とついわたしは考えてしまうのですが）、以上の異なる基準の両方に、多かれ少なかれ注目します。しかし、どちらの基準に注目するかは、人によって、また、同じ人でもその時々によって、脈絡なく区々であることが多く、おもに第一の基準が注目されることもあれば、第二の基準が注目されることもあります。

24　わたしたちの関心が第一の基準に注がれるかぎり、だれよりも賢明で善良な人でさえ、自己の人柄とふるまいに見るのは非力で未熟な点ばかりであって、横柄・身のほど知らずにふるまってよい理由は見つけられず、逆に、謙遜・後悔・悔悛すべき理由は、山ほど見つけられます。

わたしたちの関心が第二の基準に注がれるかぎり、横柄・身のほど知らずにふるまってよいという心持ちになることもあれば、謙遜・後悔・悔悛すべきだという心持ちになることもあり、自分が照合する基準よりもまぎれもなく上であるとか、まぎれもなく下であると感じられます。

25　知恵と美徳の持ちぬしは、主要な関心を第一の基準――正確な適切さと完成を示す観念――に注ぎます。各人の心には、この種の観念があり、それは、わが身と他人の双方の人柄やふるまいを観察することから徐々に形づくられます。それは、胸裏の偉大な半人半神、ふるまいを判断する偉大な裁判官・仲裁者が、ゆっくり・少しずつ・日々休まず手がける作品です。この観念の筆づかいの緻密さ、色づかいの的確さ、構図の正確さは、各人が人柄やふるまいを観察するときの感受能力の繊細さ・厳密さの程度に比例し、また、その観察時に用いられる気づかいと注意力の程度に比例します。

知恵と美徳の持ちぬしが行ってきたこの観察では、きわめて厳密で繊細な感受能力が使われ、その際には最大限の気づかいと注意力が用いられてきました。毎日、目鼻だちがどこか改良され、毎日、小さな汚れや傷がどこか修正されます。彼は、ほかの人よりもこの観念を深く研究しており、それをより克明に理解して、その像をずっと正確に心に描き、えもいわれぬ神々しいその美し

さにぞっこん惚れこんでいます。彼は、完成を表すこの原型に、できるだけ巧く自分の人柄を似せようと努力します。

しかし、彼が模倣するのは、神々しい芸術家の作品であって、これと肩を並べるものなどありえません。彼は、どんなに最善の努力をしても、そこから生まれる成功は未熟であると感じ、いつか衰え死ぬ境涯の人間が写し取ったものは、いかに多くのさまざまな要点で永遠不滅の原型に及ばないかを悟り、悲痛を感じて打ちひしがれます。彼は、注意力の不足、判断力の不足、気構えの不足から、発言でも行為でも、ふるまいでも語らいでも、完全な適切さを示す正確な準則に背いた数々の場面を思い出し、また、みずからの人柄とふるまいを形づくるとき見習いたいと願った手本からかけ離れてしまった数々の場面を思い出して、心配になり、みっともないと恥じるのです。

たしかに、知恵と美徳の持ちぬしは、第二の基準――彼の友人知人がふだん到達している程度の優秀さ――に関心を注ぐとき、自分のほうが上手であると気づくかもしれません。しかし、彼の主要な関心は、いつだって第一の基準に注がれるのですから、きっと第一の基準に照らして顔色を失うのであって、それに比べれば、第二の基準に照らして高揚する気分など高が知れています。彼は、自分よりまぎれもなく下手の人たちにさえ、得意顔でいばってさげすむことはけっしてしません。彼は、わが身の未熟を痛感し、方正にはほど遠いわが胸の境地とそこに至るまでに要した困難が身に沁み、ですから、はるか後方にいるほかの人たちの未熟を蔑視することができません。彼は、人びとの後れを侮辱するどころか、こよなく寛大な哀れみをこめてながめ、助言と垂範によって、いかなるときも進んで彼らのさらなる向上を後押しします。もし彼らがこの人にまさる特定の資格を何かもっていれば（というのも、多くのいろいろな資格において多衆の後塵を拝さぬほど完全な人がいるでしょうか。）、この人は、彼らの優位を嫉妬するどころか、他に抜きんでることがどんなにむずかしいかを知る身として、彼らの美点に敬意と名誉をささげ、それにふさわしい満腔の喝采を献じるにちがいありません。

要するに、彼の心のすみずみまで深く刻みこまれ、態度と身のこなしの端々にまでくっきり刻印されているのは、真の慎みがある人柄であり、それは、わが身の功労をずいぶん控えめに評価すると同時に、ほかの人びとの功労を細大もらさず感じる人柄です。

26　教養と創造性に富んだ学芸のすべて、つまり、絵画、詩、音楽、修辞学、哲学において、偉大な芸術家は、自分のどんな傑作

にも、まぎれもない未熟をつねに感じます。彼は、理想的完成についてなにがしかの像を思い描いていますが、自作がどんなにこの像に遠く及ばないかをだれよりも自覚しています。彼はそれをできるかぎり巧く模倣しますが、けっして肩を並べられないことに絶望します。

およそ自分の仕事にすっかり満足するのは、二流の芸術家だけです。彼は、この理想的完成の像をほとんどいだかず、それについてあれこれ考えをめぐらせたことがありません。彼がもったいぶって自作と比べるのは、主にほかの芸術家の作品であり、おそらくそれは、もういちだん下のランクに属する芸術家の作品です。

偉大なフランスの詩人、ボワロー（おそらく彼の作品中には、古代や近代における同分野のどんな偉大な詩人にも引けをとらないものがあります）は、「偉大な作家ならば自作にすっかり満足することはけっしてない」というのが口ぐせでした。彼の知人、サントゥール（ラテン語の詩を書き、学童並みの教養しかないために、浅はかにも自分を詩人であると夢想していました）は、「自分でも自作にはいつもすっかり満足している」と、ボワローに請け合いました。これに応えてボワローは、「たしかに、君は自作にすっかり満足する作家としては唯一の偉大な人だよ」と言い、たぶんニヤリとして煙に巻いたのでした。[38] ボワローは、自作を判定するさいに、理想的完成の基準と照合しました。この基準は、彼が専門にする詩作の分野において、これまで彼が深く省察し、克明に心にいだいてきたものであって、人間がいだける最高のものであったとわたしは推測します。サントゥールが自作を判定するさいに照合したのは、主として同時代のほかのラテン語詩作者で、彼がその大半にまず引けをとらないことが確実な作者たちの作品であったとわたしは思います。

しかし、妙な言いかたですが、一生涯でするふるまいや語らいをこの理想的完成といささか似た姿にまで涵養し・仕上げることは、創造性に富んだ学芸分野の作品を同等の似姿に仕上げるよりも、きっとはるかに難しいことです。芸術家は、邪魔だてされず気の向くままに、自分の作品と対座し、すべての技術・経験・知識を自家薬籠中のものとして沈思黙考します。知恵ある人は、健康なときも病のときも、成功したときも挫折したときも、へとへとに疲れて無為のうちにまどろんでいるあいだも、透徹した注意力をはたらかせるあいだも、わが身のふるまいの適切さを崩さず保たなければなりません。困難や辛酸がどんなに突然、不意をついて襲いかかってきても、けっして驚いてはなりません。ほかの人が不正義をはたらいても、けっして挑発に乗って不正義をはた

らいてはなりません。党争が荒れ狂っても、けっしてうろたえてはなりません。戦争の試練・危機が束になって押しよせても、けっして士気を失ったり、肝をつぶしたりしてはなりません。

27　自己の功労を評価したり、自己の人柄とふるまいを判定したりする際に、第二の基準――ほかの人たちによってふだん達成される標準程度の優秀さ――にひときわ多くの注意をはらう人のなかには、自分がその基準よりもずいぶん上回っていると感じて偽りもやましさもなく、事情に通じた公平な観察者のだれからもそのとおりに承認される人たちがいます。

しかし、そんな人たちの注意が主として向けられる基準は、いつだって、理想的完成でなく世間並みの完成であり、彼らは、わが身の非力・未熟についてほとんど感ずるところがなく、慎みの美徳をほとんどもたず、しばしば僭越で、思い上がり、身のほど知らずであって、自分のことは大いにほめたたえ、他人のことは大いにくさします。

彼らの人柄は、おしなべて正道から大きくはずれ、彼らの功労は、真の慎み深い美徳の持ちぬしの功労よりずっと劣ります。それなのに、お手盛りの過大な自己礼賛に基づく彼らの度を越した身のほど知らずは、大衆の目をくらますばかりか、大衆のはるか上をゆく人たちにさえ、しばしば付け入ります。どんなに無知な聖界俗界のいかさま師やペテン師も、頻々と成功を収め、それが驚嘆する成功であることも多いのですが、そんな事実は、「たとえどんなに野放図で根も葉もないはったりにも、大衆は、いかにたやすくに付け入られるか」ということを証明して余りあります。

しかし、こんなはったりが、ずいぶん大きな正真正銘の功労に裏付けられたり、誇張のかぎりを尽くす華やかな装いで並べ立てられたり、高い地位身分・強大な権力によって支持されたり、度重なる成功を収めて大衆の大歓声にかしずかれたりすると、冷静な判断力の持ちぬしでさえ、世間一般の称賛に身をゆだねることが多いものです。そんな愚にもつかない歓呼の喧騒こそ、まさしく彼の理解力を錯誤におとしいれるのにしばしば力を貸すものです。彼は、あんな偉ぶる人たちを、しかるべき距離をおいたところから見るだけなので、そのうちについ彼らを崇拝することもよくあり、そのときいだく誠実な賞賛の念は、偉ぶる当人たちの自

(38) Jean de Santeuil (1630-97). スミスの引用の出典は不明。ボワローについては、前出第三部の注(15)を見よ。

己崇拝にこもると映る賞賛にも勝ります。その場合に嫉妬心がなければ、わたしたちはみな、賞賛することに喜びを感じ、そのせいで、ひとりふける空想のなかで、自然に思わず、多くの点でまことにずいぶんと賞賛に値する人柄を、すべての点で完全無欠の姿へと変えます。

こんな偉ぶる人たちの過大な自己礼賛は、彼らとずいぶん親しい仲の・知恵ある人にはおそらく熟知され、見透かされていささか嘲笑すらされます。そんな知恵ある人は、彼らの偉そうなはったりを見て内心にんまりし、一方、距離をおいたところにいる人たちは、しきりと畏敬の念をこめて、ほとんど憧れの目で見ます。しかし、どんなにかまびすしい評判、どんなに広範な名声をつかんだ人でも、また、どんなに後代の子孫にまでよく伝わっている評判や名声をつかんだ人でも、その大半は、いつの時代も過大に自己を礼賛する人でした。

28　世間で立派な成功をおさめ、世人の感情や意見のうえに強大な権威を打ちたてるには、多少ともこんな過度の自己礼賛をしなければならないことがほとんどです。どんなに華やかな人柄も、どんな栄光に輝く行為を遂行した人も、どんなに偉大な革命を世人の境遇や意見にもたらした人も、たとえば、どんなに大きな戦果をあげた軍人も、どんなに立派な政治家や立法者も、数知れない賛同者を集めて隆盛をきわめる教派や党派のことば巧みな創始者や指導者も、彼らの多くが異彩を放ったのは、ずいぶん偉大な功労があったからですが、それに劣らず、身のほど知らずと自己礼賛があったからであって、その大きさは、彼らの偉大な功労と比べても釣り合わないものでした。おそらく、彼らは、こんなに身のほど知らずであったからこそ、もっと冷静な知性ならばけっして思いつかなかった企てに駆りたてられ、そればかりか、そんな企てに協力する追従者の柔順と服従を勝ちえたのです。ですから、こんな身のほど知らずが成功して有終の美を飾ったら、そのために彼らはしばしば幻惑されて、ほとんど狂気・愚劣にも近い見栄をはりました。

アレクサンドロス大王は、他人から神だと思われたいと願ったばかりか、少なくとも、自分を神だと思い込むとても強い心理的習性があったように映ります。あらゆる境遇のなかでもっとも神らしからぬ死の床にあって彼が友人に頼んだのは、神とあがめられる錚々たる存在の名鑑に、彼自身はずいぶん前に列叙されていましたが、老母オリュンピアスも同じくそこに追加される栄誉に

与らせてほしいということでした。[39]

賛同者や弟子たちから尊敬に満ちた賞賛を浴び、公衆から満場の喝采を浴びているさなか、託宣が、おそらくこの喝采に続いて出され、ソクラテスをもっとも知恵ある人として宣言したのでした。[40] 彼の知恵は偉大でしたから、その託宣によって自分を神だと思い込むことはありませんでしたが、ある種の見えざる神々しい存在から人知れずたびたびお告げがあると思い込むのを止められるほど偉大ではありませんでした。[41]

カエサルは、聡明な頭脳でしたが完全にそうだったわけではなく、女神ヴィーナスに連なる神々しい出自であることに、大いに気をよくするのを思いとどまることはできませんでした。また、ローマ元老院がカエサルのもとを訪れ、破格の名誉を授与する数通の辞令を贈ったとき、彼は、このように祖先として主張した母神の寺院のまえで、起立もせずにその由緒ある議院を迎え入れました。[42] こんないばった態度は、ほとんど子どもじみた見栄の所産であるほかの行為とあいまって、かつてのまことずいぶんと明敏で深大な理解力からは予想できないものであり、公衆の猜疑心を沸きたたせ、そのせいで彼の暗殺者たちを大胆にし、その共謀の実行を急きたてたように思われます。

近ごろの宗教も気風も、わたしたちの偉人を鼓舞して自分のことを、神はもとより預言者だとさえ思い込ませることはほとんどありません。しかし、成功が、大きな人気とあいまてば、しばしばどんなに偉大な人でもずいぶんのぼせ上がって、実際に自分にそなわるよりもずっと高い意義と才能をわが身に事寄せて語り、また、こんな身のほど知らずのせいで心がはやり頻々と軽率な冒険をして、身の破滅につながることもあるのです。

偉大なマールバラ公は、十年の間、ほかの将軍がだれも誇れないほど連戦連勝の華々しい成功を収めましたが、それに幻惑されて軽率な行動に走ったことは一度だってなく、また、軽率なことば・表現を一言でも口走ったことはまずありませんでしたが、こ

(39) Quintus Curtius, *History of Alexander*, IX. vi. 26.

(40) Plato, *Apology*, 21. a 参照。

(41) たとえば、*Apology*, 31 c-d & 40 a-c ; *Euthyphro*, 3 b ; *Republic*, VI, 496 c ; *Theaetetus*, 151 a ; *Phaedrus* 242 b-c ; *Symposium*, 202 d-e & b-c などを見よ。

(42) Suetonius, *Lives of the Caesars*, I. 78 ; Cicero, *De officiis*, I. viii. 26 参照。

れはほとんど彼だけの特性です。[43] 彼と同じように抑制のきいた冷静さ・自制心が、のちの時代のだれかほかの偉大な軍人に事寄せて語られることはありえないとわたしは思います。それは、オイゲン公にもなく、故プロイセン王にもなく、偉大なコンデ公にもなく、グスタヴィウス・アドルフスにさえもありませんでした。テュランヌは、マールバラ公の域にかぎりなく近づいたと思われますが、彼の生涯にある別種の事績を少し見れば、彼の冷静さ・自制心が、偉大なマールバラ公の完成度には到底およばなかったことを証明して余りあります。[44]

29　私生活上のつつましい計画を立てるにせよ、野心とうぬぼれによって高い身分を追求するにせよ、立派な才能と実績ある起業能力が、最初のうちは意気盛んで数々の事業に手を伸ばし、最後にはいやおうなく破産・破滅の末路をたどった例はたくさんあります。

30　公平な観察者ならだれしも、上のような気概、豪胆、高い志操をもった人たちの真の功労に敬意と賞賛の念をいだきますが、それは、正当で根拠がしっかりした感情であり、しからば、ゆるぎなく長続きする感情でもあって、彼らの運勢の良し悪しにまったく左右されません。

しかし、公平な観察者がややもすると彼らの過大な自己評価と身のほど知らずにいだきがちな賞賛は、そうではありません。彼らが成功を収めているあいだ、なるほど、公平な観察者は、彼らにすっかり征服され・打ち負かされることがよくあります。成功は、観察者の両眼にふたをし、彼らの事業がひどく目先の利かない不注意なものであること、そればかりか、しばしばひどく不正であることを隠します。こうして、公平な観察者は、彼らの人柄のこの欠点［過大な自己評価と身のほど知らず］を少しも非難せず、それをみる目には大抵きわめて熱狂的な賞賛の念がこもります。しかし、彼らが運に恵まれなければ、情勢は彼らの様相と呼称を変更します。かつて英雄の豪胆であったものは、野放図な軽率・愚劣というそれ本来の呼称を取り戻し、また、かつて華々しい順境の陰に隠れていたあくどい貪欲と不正義は丸見えになり、彼らの起業能力の輝きを残らず汚します。

もしカエサルがファルサリアの戦いで勝たずに敗北していたらどうだったでしょうか。この時点での彼の人柄は、カティリーナ

のそれを少し上回る程度の格付けだったでしょうから、どんなに気弱な人でも、カエサルが企てた祖国の法に背く計画をけしからんという目で見て、おそらく、それは、当時カトーが党派的人間の敵愾心で胸をいっぱいにしてその計画を見たときの思いにさえも、けっして引けをとらなかったでしょう。[45] カティリーナは、多くの立派な資質をそなえ、その真の功労は、今日、承認されていますが、それと同様に、カエサルは、［敗北していたとしても］その真の功労――審美眼の的確さ、文章の簡潔と端麗、巧みな弁舌の適切さ、戦う技能、辛酸に応じる臨機の才、危機に際しての冷静沈着な判断力、友人に対する誠実な愛着、敵に対する無類の高潔無私――をすべて承認されていたでしょう。しかし、カエサルには何もかも我がものにしたいという野心があり、そこからくる例のいばった態度や不正義が［VI. iii. 28］、そんな真の功労の栄光をすべて闇につつみ、消し去っていたでしょう。運命の女神は、この局面でも、すでに言及したほかの局面でも、世人の道徳感情に大きな影響を及ぼし、彼女が好意をよせるかそっぽを向くかで、同じ人柄でも、ひろく愛され賞賛される的にもなれば、あまねく憎まれ軽蔑される的にもなります。

しかし、運のせいで道徳感情に生ずるこの大きな乱れは、なんの役にも立たないわけではけっしてありません。わたしたちは、この場合でも、ほかの多くの場合と同様、神の知恵が人間の弱さや愚かさにさえもはたらくのを賞賛することができます。[46] わたしたちが成功によせる賞賛の念は、富と上流身分によせる尊敬の念と同じ原理に基づいており、やはり、身分地位の区分と社会の秩序を打ちたてるのに不可欠な感情です。

---

(43) マールバラ公は、スペイン継承戦争の期間、一七〇二年から一七一一年までイギリス軍の司令官であった。

(44) Prince Eugène of Savoy（1663-1736）スペイン継承戦争におけるオーストリア軍の司令官。Frederick II（the Great）of Prussia（1712-86）. Louis de Bourbon, Prince of Condé（1621-86）フランスの将軍で、生涯を通じて Turenne の宿敵であった。Gustavus Adolphus（1594-1632）一六一一年から一六三二年までスウェーデン国王、三十年戦争の初期においてプロテスタント軍の司令官。Henri de La Tour d'Auvergne, vicomte de Turenne（1611-75）フランス大元帥。

(45) カエサルは、ファルサロスの戦い（紀元前四八年）でポンペイウスを破ってローマの内戦に勝利し、生き残って勝者の歴史を書いた。貴族勢力の指導者であった Marcus Porcius Cato Uticensis（95-46 BC）が強く敵対したにもかかわらず、カエサルはそんな歴史を書くことで、ローマの国制に仕掛けた自らの試みが陰謀と見られるままにしておくことを避けられ、その点で、キケロによって陰謀の責任を帰せられたカティリーナとは違った（前掲注（33）参照）。

(46) 前出 II. iii. 3. 2 参照。

わたしたちがこの成功によせる賞賛の念から教わるのは、渡世の行きがかりで上司に指定される人たちに、もっとすんなり服従しなさいということ、また、もはや抵抗できない・運が味方した暴力を畏敬の念、ときには一種の尊敬に満ちた親愛の情さえこめて注視しなさいということです。そこには、カエサルやアレクサンドロスのような華やかな人柄によってふるわれる暴力ばかりか、アッティラやチンギスハンやティムールのような、きわめて粗暴・殺伐とした蛮人によってふるわれる暴力もしばしば含まれます。[47] 大衆は、そんな強力な征服者をだれかれとなく自然につい仰ぎ見、その目にこもる賞賛は、たしかにずいぶん浅はかで愚かですが、驚嘆を表しています。しかし、大衆がこの賞賛から教わるのは、抵抗不可能な武力によって政府を押しつけられ、渋ったところでそこから逃れようもない状況下では、さほどためらわず黙って従いなさいということです。

31　しかしです。順境にいて過大な自己評価をする人は、心正しく慎み深い人に比べて、どこか秀でたところをもつと映ることがあります。群衆は、このふたりを遠くから見るだけなので、過大な自己評価をする人のほうを支持して喝采を贈る場合が多く、それは、心正しく慎み深い人を支持するときには一度だって贈ったことのないとても大きな喝采です。

それにもかかわらず、すべての事情を公正に勘案すると、優劣を決する真の天秤は、おそらくどんな場合でも、心正しく慎み深い人を支持して大きく傾き、過大な自己評価をする人を軽く扱います。本当に自分に帰する功労以外は、自分でもわが身に事寄せて語らず、他人が彼に事寄せて語ることも望まない人は、面目を失うことを恐れませんし、真実が露見することにおののきません。彼は、ただ、自己の人柄が純真でゆるがないことに満足・安心します。

彼を賞賛する人たちはあまり多くなく、その喝采もあまり大きくないかもしれません。しかし、彼をだれよりも間近に見、だれよりもよく知る至高の知恵の持ちぬしは、彼をこよなく賞賛します。本当に知恵ある人にとって、一人の知恵者からもらう怜悧で考えぬかれた是認は、熱狂的だが無知な一万人の賞賛者からもらう騒々しい満場の喝采よりも、心に沁みる満足感を与えます。この人はパルメニデスに賛成するかもしれません。パルメニデスは、アテネの公開の集会において学問的な演題で講話をし、プラトンひとりを除いて、そこにいる全員が彼のもとを立ち去ったのを見てとりましたが、それにもかかわらず、講話を続け、そして、「プラトンがひとりいれば、わたしには申し分ない聴衆だ」と言いました。[48]

32　過大な自己評価をする人の場合、話は違います。彼をだれよりも間近にみて知る・知恵ある人びとは、ほとんど彼を賞賛しません。彼は、順境に酔いしれるただなか、そんな知恵ある人びとの冷静で正当な敬意が、わが胸の野放図な自己礼賛とはずいぶんかけ離れているため、それを単なるいじわる・嫉妬にすぎないとみなします。

彼は、きわめて親しい友人たちにさえ疑いの目を向けます。友人とのつきあいは、彼の神経を逆なでするようになります。彼は、友人たちを自分の面前から追い払い、仲間の献身裨益に感謝しないばかりか、残酷で正義にともる仕打ちで報います。おべっか使いや裏切りものは、彼の見栄と身のほど知らずに心酔するふうを装いますから、彼は、そんな彼らをむやみに信じて疑いません。そして、彼の人柄は、当初は、いささか欠点があっても、総じていつくしまれ、仰ぎ見られもしましたが、最後には、軽蔑され、毛ぎらいされるようになります。

アレクサンドロスは、順境に酔いしれるただなか、父フィリッポスの武勲を自らのそれよりも上に見たクレイトゥスを殺害し、また、ペルシャの作法で彼に崇敬の念を示すことを拒否したカリステネスを拷問にかけて殺しました。また、アレクサンドロスは、父の偉大な友人、老将の威厳をもつパルメニオンを謀殺しましたが、その前に、事実無根の嫌疑を彼の息子にかけ、まず拷問台に、つぎに処刑台に送りました。この老人は、ほかのすべての息子たちには彼が司令する軍務に際して先立たれ、この息子がひとり残されているばかりでしたのに。[49] フィリッポスが口ぐせのように、「アテネ人は毎年十人の将軍を見つけられてずいぶん幸運に恵ま

(47)　Attila（406-53）は、フン族の王。Genghis Khan（1162-1227）はモンゴルの征服者。Tamerlane, or Tamburlaine（1336-1405）はタタールの征服者。

(48)　Parmenides は紀元前五一五年頃に生まれて四四〇年代に没したが、その存命中の紀元前四二七年にプラトンは生まれた。しかし、Cicero, *Brutus*, li. 91 で、似たようなことが、Antimachus が詩を朗読したときの話として語られている。

(49)　スミスが言及しているのは、紀元前三三四年から三二三年の間、アレクサンドロス大王が小アジアとその彼方に軍事作戦を展開したときの出来事である。クレイトゥスは、アレクサンドロスの乳母の兄弟で、王の命を救ったことがある騎馬隊の将官であったが、紀元前三二八年に宴会でアレクサンドロスに殺害された。カリステネス（紀元前三七〇年頃の生まれ）はアレクサンドロスの家庭教師アリストテレスの親戚で、王の御用歴史編纂者であり、三二七年に陰謀に加担した嫌疑で殺害されたが、ペルシャ風にアレクサンドロスを神とあがめて歓迎することを拒絶したために殺害されたというわさもあった。Parmenion（c. 400-330）は、アレクサンドロスの父親フィリッポス王の代から厚く信頼された副指令官として引き続き仕えた。その間、パルメニオンの息子 Philotas（c. 360-330）は、頭角を現していた将官であったが、陰謀の嫌疑をかけられ処刑された。アレクサンドロスは念のため、その父親も殺害させた。

れているが、自分自身はといえば、一生涯かけても、パルメニオンを除けば、一人の将軍も見つけられないだろう」と語った人物、そのパルメニオンにしてこんな目にあったのです。[50] このパルメニオンが油断なく注意しているからこそ、フィリッポスはいつでも打ちとけ安心して休息し、陽気な宴会の時間がくれば、「さあ、わが友よ、呑もう。われわれは呑んでも安全だ。パルメニオンはけっして呑まないから」と口ぐせのように言いました。[51] まさしくこのパルメニオンの陪席と助言があったればこそ、アレクサンドロスはその勝利をすべて手にしたのであって、彼の陪席と助言なしには一つの勝利も手にしなかっただろうと言われていました。[52] アレクサンドロスが、その権力と権威の座に遺したのは、卑しい身分にあって王をほめそやし・こびへつらっていた友人たちであり、彼らは、アレクサンドロスの帝国を自分たちのあいだで分割し、こうして王の家族と親族からその遺産を強奪したあと、生き残った彼らをつぎつぎと虱つぶしに男女の別なく殺害しました。

33　わたしたちは、華やかな人柄のなかに世人の月並みな水準よりも立派で際立った優越性を見てとると、そんな人柄の過大な自己評価には、たいてい容赦をするばかりか、深く入りこみ・共感します。わたしたちは、こんな人柄を「気概がある」、「豪胆である」、「高い志操がある」と呼びます。いずれの語にも、讃辞と賞賛の意味合いが相当に含まれます。

他方、そんな際立った優越性を認められない人柄の過大な自己評価には、入りこみ・共感することができません。そんな自己評価には嫌気をもよおし、胸がむかむかし、それを容赦したり黙認したりするには、いささか困難が伴います。わたしたちは、そんな自己評価を「高慢」または「見栄」と呼びます。このふたつの語のうち、後者にはつねに、また、前者にはほとんど、非難の意味合いが相当に含まれます。

34　しかし、上のふたつの悪徳は、いずれも過大な自己評価の亜種なので、いくつかの点で似ていますが、それにもかかわらず、多くの点で相互にずいぶん違っています。

35　高慢ちきは、裏表がなく、心の底から自己の優越性を確信しています。もっとも、なぜそんなに自信があるのか推測するのが

むずかしいことは、ときにあるかもしれません。

高慢ちきが、わが身をあなたの境遇におき、あなたから自分をながめてほしいと願う視点は、実際に自分がわが身をながめる視点以外ではありません。彼があなたに要求するのは、彼が正義であると思うもの以外ではありません。もしあなたからの尊敬が、彼がわが身にはらう尊敬に及ばないと映れば、彼は、気が滅入る以上に、神経を逆なでされ、現実の権利侵害をこうむったも同然の憤怒を感じます。

しかし、高慢ちきは、そんな場合でも、自己の言い分の根拠をもったいぶって説明しませんし、あなたの敬意をえるために機嫌をうかがうことを潔しとしません。彼は、あなたからの敬意を見下すそぶりさえしてみせ、わが優越性をあなたに悟らせるより、むしろ、あなた自身の卑小さをあなたに悟らせることで、名乗りはじめた身分を維持しようと努めます。彼の願いは、あなたが彼自身にはらう敬意を掻きたてることより、むしろ、あなたがあなた自身にはらう敬意を滅入らせることだと思われます。

36　見栄っぱりは、裏表があり、わが身に事寄せてあなたに語ってほしい自分の優越性を、心の底から確信していることはまずありません。

見栄っぱりが自分をあなたからながめてほしいと願う観点は、わが身をあなたの境遇におき、自分の知るすべてをあなたが知ると想定して実際にわが身をながめうる観点よりも、ずっと華やかです。ですから、あなたがそれとは違った観点――たぶん彼にふさわしい観点――から彼をながめると映れば、彼は、神経を逆なでされる以上に、ずっと気が滅入ります。

見栄っぱりは、わが身に事寄せてあなたに語ってほしい人柄を主張する根拠について、あらゆる機会をとらえて並べ立て、彼に少しはそれなりにある良い資質・素養をやたら大げさ・不必要に見せびらかしたり、ときには、全然無いか、あるとしてもまこと微々たるもので皆無といっても過言でない資質・素養をもつと偽って主張したりします。彼は、あなたの敬意を見下すどころか、

(50) Plutarch, *Apophthegmata* (*Moralia*, Book III), 177 c.

(51) Athenaeus, *Deipnosophistae*, 435 d を見よ。ただし、フィリッポスが語っていたのは、彼の別の将軍 Antipater のことである。

(52) Quintus Curtius, *History of Alexander*, VII. ii. 33.

六三

それを得ようときわめて入念に用意してご機嫌をうかがいます。また、あなたの自己評価を滅入らせたいと願うどころか、よろこんでそれを重んじ、見返りにあなたからお手盛りの自己評価を重んじてもらえると期待して胸をふくらませます。見栄っぱりは、人からおだててもらいたいために、人をおだてます。彼は、あなたを喜ばせる術をみがきますし、また、優雅に愛想よく応接し、ときには真の欠くべからざる善事の計らいをして、あなたに取り入り・株を上げようと努めます。もっとも、そんな計らいは、おそらく不必要にひけらかされることが多いのですが。

37　見栄っぱりは、才覚や美徳にはらわれる尊敬と同じように、地位や財貨にはらわれる尊敬を目にして、この尊敬を不正に使用したいと夢見ます。ですから、彼の衣装、馬車、暮らしぶりは、どれも実際に彼に属するよりも高く大きな地位と財貨を誇示します。彼は人生の駆け出しのころ、こんな愚かな負担に数年間もちこたえるために、人生が終わるずっと前に貧困と辛酸におちいることがよくあります。それでも、彼がその出費をまかない続けられるうちは、わが身をながめてその見栄は大いに満たされますが、そのときどこからながめるかといえば、彼が知るすべてをあなたが知ると仮定したときにあなたが立つ視点ではなく、彼の口が講釈によってそこから自分をながめるよう、まんまとあなたを言いくるめたと想像する視点です。これは、見栄から生まれるあらゆる幻影のなかで、おそらくもっともありふれたものです。

名もない見ず知らずの客として外国を訪ねたり、辺境の州から自国の首都を訪ねて短期間滞在したりする人びとが、こんな所業にでようと試みることはきわめてよく見られます。こんな試みの愚かしさは、いつだってとてもひどく、これほど分別ある人にふさわしくないことはありませんが、旅先で試みられる場合には、ほかの大方の場合と比べてさほどひどいとは言い切れません。もし彼らの滞在が短ければ、みっともない露見を免れるかもしれず、また、数ヶ月か数年のあいだ見栄にひたったあと故郷にもどり、過去の散財の無駄を将来の吝嗇によって立て直せるかもしれません。

38　高慢ちきは、こんな愚かしさのせいで非をとがめられることはまずありません。彼は、自己の威厳の感覚をもっていますから、自分の独立性を保とうと注意深くなり、また、当座の財貨が少なければ、節度を保ちたいと願いつつも、あらゆる出費に際して倹

約と監査に余念がありません。見栄っぱりが大げさにひけらかす出費は、高慢ちきの神経をいちじるしく逆なでします。おそらく、見栄っぱりの出費が、彼の出費の影を薄くするからでしょう。高慢ちきは、見栄っぱりの出費がまったく不相応の地位をいばって僭称するものとみなして怒りを炸裂させ、それを話題にすればかならず散々に酷評し、きわめて手厳しい叱責を浴びせます。

39　高慢ちきは、同格市民とつきあってくつろいだ気分を味わうとはかぎらず、上役とつきあえばなおさらそんな気分にはなりません。彼は、偉そうなはったりを利かせることができませんし、はったりを並べてみせる勇気もなくすほどそんな一座の表情と語らいによってずいぶんと神妙な気分になります。彼の頼みの綱は、自分の部下、おべっか使い、生計を自分に依存する者たちのように、自分より低い地位身分の人たちとつきあうことですが、彼はそんな一座にほとんど尊敬の念をもっておらず、すすんで近づきたいと思いませんし、そこは彼にとって少しも心地よくありません。

高慢ちきは、めったに上役を訪問しませんし、そうする場合でも、その目的は、彼らに伍して生き・満足感を実際に味わうためであるよりも、むしろ、彼らと肩を並べて生きる資格が自分にあることを示すためです。これは、クラレンダン卿がアランデル伯についてつぎのように述べているところと重なります。伯爵が宮廷に出かけることはあったが、それは、そこにいかなければ自分よりも上流身分の人を見つけられなかったからである。けれども、彼が宮廷に出かけるのはまれであった。なぜなら、そこには自分よりも上流身分の人がいたからである。[53]

40　見栄っぱりについてはまったく話が違います。見栄っぱりは、高慢ちきが上役の一座を避けるのと同じくらい、しきりに上役の一座のご機嫌をとります。上役の華やかさは、その周りにたむろする人たちに華やかな影を投げかける、と見栄っぱりは考えるように思われます。

彼は、国王の宮廷や大臣の謁見の場に出没し、われこそ財貨と昇進を競って名乗りをあげている者だという風をただよわせます。

(53) Clarendon, *History of the Rebellion*（前掲注(35)参照）, I, 119.

六五

そんな者でないほうが、本当はよほど大切な幸せに浴するのに、彼はその味わいかたを知りません。彼は、上流身分の食卓に連なることを許されるのがうれしくてたまらず、また、そこで上流身分と親しくできる光栄をほかの人に誇示することは、なおさらうれしくてしかたありません。彼はできるだけ、いまをときめく人びと、世論を導くと思われている人びと、才気煥発な人びと、学識豊かな人びと、大衆に人気がある人びとと交際します。一方、彼は、どんなに仲の良い友人の一座であっても、行く末定まらぬ公衆の支持がたまたま彼らに少しでも不利な雲行きになれば、いつだってつきあいを避けます。見栄っぱりが自分を売りこみたいと願う相手次第では、そこで使われる手段がとても繊細であるといえない場合もあります。彼の手段は、不要なひけらかし、根も葉もないはったり、何を言われても迎合する態度ですが、大抵はおべっかです。もっとも、その大半は、快くはつらつとしており、太鼓持のいやらしい鼻につくおべっかではまずありません。これに対して、高慢ちきは、けっしておべっかを使わず、大抵、だれに対してもほとんど礼儀をわきまえません。

41　しかし、見栄は、根も葉もないはったりの限りを尽くすにもかかわらず、ほとんどいつもはつらつとして陽気な情念であり、根っから善良な情念であることもずいぶん多いのですが、一方、高慢は、いつも謹厳、陰険、辛らつな情念です。見栄っぱりは、嘘をつく場合でも、悪気のない嘘ばかり、わが身を引き立てるために言いますが、他人をおとしめるつもりはありません。高慢ちきに対して公正を期するために言っておきますが、彼は嘘をつくほど卑しく落ちぶれることはめったにありません。

しかし、高慢ちきが嘘をつく場合、さほど悪気がないとはお世辞にもいえません。その嘘にはすべて悪意があり、他人をおとしめる意図があります。他人に不当な優位が与えられていると彼には思われるので、胸が怒りでいっぱいになります。彼は、いじわるい嫉妬の目で上座の他人をながめ、その人たちを話題にするときには、大抵、彼らが優位に立つ根拠と思われているどんなことにも難癖をつけて薄弱にしようと懸命に努力します。高慢ちきは、上座の人たちに不利なうわさ話なら何であろうと、自分でそれをでっち上げることはめったにしなくても、しばしば嬉々としてそのうわさ話を信じ、それを繰り返し人に語るのをまったく躊躇せず、そればかりか、多少の誇張を交えることさえあります。見栄から出る嘘はどんなに悪いものでも、いわゆる罪のない嘘ばかりですが、高慢が落ちぶれてつく嘘はいつだって、たちの悪い嘘ばかりです。

42　わたしたちは、高慢ちきと見栄っぱりを疎んじますから、これらの悪徳の非をとがめる場合、その人を、つい世間一般の水準よりも高めではなく、むしろ低めに評価する一般的習性があります。しかし、この判断がまちがうことはいたって多く、むしろ、高慢ちきと見栄っぱりは（おそらくその大半については）、世間一般の水準よりも相当上であることが多いとわたしは思います。もっとも、こんなわたしの評価は、高慢ちきが信じて疑わない自己評価、あるいは、見栄っぱりがあなたからしてほしいと願う評価に比べれば、さほど高くありません。彼らは、当人自身の言い分に照らしてみれば、軽蔑の正当な対象と映るかもしれませんが、その対抗者・競争者の大半の実情に照らしてみれば、かなり違ったようすに見え、世間一般の水準よりもずいぶん上に映るかもしれません。

この実際の優越性がある場合、高慢には、仰ぎ見られる多くの美徳がしばしば伴います。それは、嘘をつかない誠、実直、名誉に対する鋭敏な感覚、心がこもり揺るぎない友情、微動だにしない堅固で決然とした意志です。また、見栄には、いつくしまれる美徳が多く伴います。それは、情け深さ、応接の優雅さ、どんな些事にも一肌ぬぐ心意気、ときには重大事において示す真の高潔無私です。しかし、見栄は、高潔無私を披露するとき、できるだけ華やかに彩りたいとしきりに願います。前世紀、フランス人は、その対抗者・敵対者から、見栄っぱりであると、また、スペイン人は、高慢ちきであると非をとがめられ、他方、局外の諸国民から、フランス人は、もっといつくしまれるべき人たちであると、また、スペイン人は、もっと仰ぎ見られるべき人たちであると考えられる傾向がありました。

43　「見栄っぱりな」、「見栄」という語は、けっしてよい意味では理解されません。わたしたちは、機嫌よく人を評しているときに、「見栄をはるぶん、まだしもだ」とか、「彼の見栄は、神経を逆なでするよりも憂さを晴らす」といった人物評をすることがありますが、それにもかかわらず、見栄を彼の人柄の悪癖とか物笑いの種とみなします。

44　これとは対照的に、「高慢な」、「高慢」という語は、よい意味［誇り高い、自尊心］で理解される場合があります。わたしたちは人を評するときに、「彼はあまりにも誇り高く、また、あまりにも気位の高い自尊心をもつので、卑賤な仕事をけっして潔し

六七

としない」とよく言います。この場合、高慢は、豪胆と混同されています。

なるほどアリストテレスは、世界に通じた哲学者であって、豪胆な人間の人柄を多面的に描き、それは、この二百年来スペイン人の人柄に事寄せて語られるのがふつうであった特色と同じです。「彼はどんな決意をするときも慎重であり、どんな行動をするときもゆっくりで、のろくさえある」。「彼の声は謹厳であり、その話は慎重にことばを選び、その足どりと動作は悠然としている」。「彼は無精で、なまけものにさえ映り、些事にあくせく立ちまわる気をまったく起こさないが、重大で栄えある場面ではいつも決死の猛然たる覚悟で行動する傾向がある」。「彼は、危険の愛好者でなく、小さな危険にはすすんでわが身をさらそうとしないが、大きな危険にはすすんでわが身をさらす」。「彼は、危険にわが身をさらすとき、みずからの生命をまったく顧みない」[54]。

45　高慢ちきは、あまりにも自己に満足しきっているのがふつうなので、自分の人柄に直すべき点があるとは考えません。自分には非の打ちどころがないと感ずる人が、さらなる改善をすべてさげすむのは、まったく自然なことです。彼の自己満足と、自分こそ上だという見当違いのうぬぼれは、青年期から最晩年までつきまとうのがふつうです。『ハムレット』で言われるように、彼は、自分の罪をすべて背負い、終油の秘蹟を受けないまま死ぬのです[55]。

46　見栄っぱりの場合、しばしば事情はかなり違います。敬意や賞賛を注がれるのが自然で適切な対象である資質・才覚がある場合に、他人から敬意・賞賛を得たいと望むのは、真の栄光を心から愛する気持ちです。この情念は、人間の自然本性の随一の良き情念ではないにしても、最良の情念のひとつであることはたしかです。

見栄は、そんな栄光にあずかる資格をもつ以前の未熟な時期に、栄光を不正に使用する試みにすぎないことがとてもよくあります。あなたに二五歳未満の息子がいるとして、彼が伊達男にすぎなくても、だからといって彼が四〇歳までに、とても賢いひとかどの男になるという希望を捨ててはなりませんし、彼がいまは才覚・美徳を大げさにひけらかし、中身もなくはったりを言うだけであっても、そんな才覚・美徳にことごとく長じた真の実力者になるという希望を捨ててはなりません。

教育に秘められた偉大な力は、見栄を適切な目標に向かって導きます。けっしてつまらない素養によって自分の値打ちを彼に測

らせてはなりません。しかし、彼が真に重大な意義のある素養をもつと主張する場合、かならずしも水をさす必要はありません。もし彼がそんな素養を身につけたいと真摯に願わなければ、そんな主張をしないでしょう。この欲求を励ましてください。そんな素養の獲得を手伝うあらゆる手段を彼に授けてください。そしてまた、彼が目標に達する少し前にそこに到達した風を装うことがあっても、あまりひどく気分を害さないでください。

47　以上、わたしは、高慢と見栄のそれぞれが本来的にそなわる人柄に即して作用するときの、際立つ典型的な特徴を述べました。しかし、高慢ちきは、しばしば見栄っぱりであり、見栄っぱりは、しばしば高慢ちきです。自分が受けるに値する評価よりもずっと高い自己評価をくだす人が、他人から受ける評価が自己評価をさらに上回ってほしいと願うのはごく自然ですし、自己評価を上回る評価を他人から受けたいと願う人が、同時に、自分が受けるに値する評価よりもずっと高い自己評価をくだすこともまたごく自然です。

高慢と見栄は、同一人物の人柄に混在することが多いせいで、これらの悪徳の典型的な特徴はどうしても混同されます。わたしたちは、見栄の・皮相で不謹慎なひけらかしと、高慢の・やたら意地悪くあざけっていばり散らす態度が結びつく例をみとめることがあり、そのため、ある具体的な人柄をどう位置づけるべきか、つまり、高慢ちきに分類するか、見栄っぱりに分類するか、ときおり戸惑います。

48　世間並みの水準を相当上回る功労の持ちぬしには、自分を過大評価する人もいますが、過小評価する人もいます。後者の人柄は、さほどたてまつられていなくても、大抵、私生活上のつきあいで不快なところは少しもありません。彼の仲間たちはみな、まこと万事に控えめで気取らない人とつきあって、とてもくつろいだ気分を味わいます。

---

(54)　Aristotle, *Nicomachean Ethics*, IV. 3, esp. 1125a13-16, 1124b 7 -9.

(55)　Shakespeare, *Hamlet*, I. v. 76-9.　亡霊が自らの死について話す場面［「終油をほどこされない」は、語源の異なる unanointed, unanealed が併記されているが、これは、類似の儀礼が古代宗教にもあったことを示すのであろう。］

六九

しかし、そんな彼の仲間たちは、世間並みの水準を上回る鑑定眼と高潔無私を兼備しなければ、彼を案じていささか親切心を起こすとしても、大した尊敬の念をもつことはめったにありません。ですから、彼らの親切心の温かさが、その尊敬の念の冷淡さを埋め合わせるのに十分であることはまずありません。

せいぜい世間並みの鑑定眼しかもたない人が見積もる他人の価値は、その他人が見積もると映る当人自身の価値に比べ、けっして高くありません。彼らは、「その人は、そんな境遇や職責に最適かどうか、自分でも疑っているように思われる」と言い、自己の適格性になんの疑問もいだかない厚かましい無能なやからに即座に軍配をあげます。

しかし、彼らは、たとえ鑑定眼があっても高潔無私でなければ、きっと彼の純朴さを食いものにし、自分になんら要求する資格のない優位を、不謹慎にも彼を差し置いて僭称します。彼は根っから善良なので、しばらくはこれにがまんできるかもしれませんが、結局はへとへとになり、大抵、そのときにはもうあとの祭りです。彼が身をおくはずであった地位は、失われて戻ってこず、自分から尻ごみした結果、彼よりずっと功労は小さくても、もっと積極的な仲間のだれかによって不正に使用されるのです。

こんな人柄の持ちぬしが世間を渡るさいにいつも公正な正義によって待遇されるならば、それは、彼が若いころ仲間を選ぶときずいぶん好運だったからにちがいなく、たとえ彼のほうから親切をほどこしたことがかつてあり、親友としてふるまうことを期待してよい相手から公正に待遇される場合でも、そうであったからにちがいありません。青年期があまりにも気取らず、無欲すぎるものならば、大抵、それに続くのは、日の目を見ない・苦情と不満ばかりの老年期です。

49　自然が世間並みの水準より相当低く造形した不運な人たちは、実際に自分がその水準から隔たっているよりも一段と低く自分を評価するように思われることがあります。こうした卑下のせいで、彼らは知恵おくれに退行すると映ることがあります。

知恵おくれの人たちを注意深く調査したことがある人なら気づくでしょうが、世に愚鈍と認められながら知恵おくれとは見なされない人たちが別におり、そんな幾人かと比べて、知恵おくれの人の多くは、理解力をつかさどる諸能力のどこも劣りません。知恵おくれの人の多くは、せいぜい標準的な教育しか受けていませんが、読み書き計算はわりにしっかりと教わっています。一方、知恵おくれにはけっして分類されない多くの人たちは、きわめて行き届いた教育を受けたのに、また、年齢が進んでからは、幼年

期の教育が授けなかった学習にとりかかるだけの気概をもったのに、読み書き計算のどの素養もろくに習得できていません。

しかし、こんな人たちは、自尊心が本能的にはたらいて、年齢と境遇の点で同格の市民と肩を並べ、勇気と堅固な意志で仲間のあいだに固有の居場所を維持します。一方、知恵おくれの人は、これとは正反対の本能がはたらいて、あなたからどんな集まりを紹介されても、それより下位に自分がいると感じます。知恵おくれの人は、いじめられる極度の危険にさらされており、そんな目にあうと、激高・逆上するせいできわめて激しい発作を起こす可能性があります。しかし、あなたが彼にどんな厚遇、親切、寛容を示しても、彼を引き立ててあなたの同格市民として語らう気にさせることはけっしてできません。しかし、ともかく彼をあなたと語らう気にさせることができれば、彼の受け答えは十分に要領を得ており、こまやかな神経さえもつことにしばしば気づくでしょう。

ところが、知恵おくれの人たちは、自分のほうがひどく劣るというはっきりした意識をいつも心に刻んでいます。彼は、萎縮し、いうなればあなたの視線と語らいが届かないところに引きこもり、わが身をあなたの境遇に置いて、「あなたは、柄にもなく身を低くして見せるが、それにもかかわらず、わたしをご自分より著しく劣位にいると見なさずにはいられない」と感じるように思われます。知恵おくれの人たちがこんなふうである主たる、あるいはすべての原因は、理解をつかさどる諸能力のしかるべき麻痺か鈍化であると思われる場合があり、おそらく彼らの大半はそうした例でしょう。一方、知恵おくれの人のなかには、そこに分類されない多くの人たちと比べて、理解をつかさどる諸能力が鈍いとか麻痺しているとは映らない人たちがいます。しかし、同胞市民と対等な地位で持ちこたえるのに必要な本能、自尊心は、そんな知恵おくれの人には微塵もなく、そこに分類されない人たちにはあるように思われます。

50　したがって、自己評価がその人自身の幸福と満ち足りた感じをきわめて強くもたらす場合、その評価の水準は、公平な観察者にとっても同様にきわめて心地よいと思われます。当人の自尊感情が、公平な観察者ならもつはずの水準で、その線を越えなければ、きっとその人は、自分でも授かるのがふさわしいと思う敬意をすべて他人から獲得します。彼は、自分に与えられるのがふさわしい敬意しか欲しがらず、そこに満足しきって安住します。

七一

51　これとは逆に、高慢ちきと見栄っぱりは、片時も満ち足りた気持ちではありません。高慢ちきは、ほかの人たちが不当に優位を占めていると思い込んで、それにぶつける怒りにさいなまれます。見栄っぱりは、根も葉もないはったりが露見すればつきまとう屈辱感を予見して絶えず戦々恐々としています。

たとえ真に豪胆な人でも野放図なはったりを利かせるならば、華やかな才能と美徳、なかんずく好運に助けられるときには大衆に付け入りますが、知恵ある人びとに付け入ることはありません。彼は、大衆の喝采にはほとんど見向きもせず、知恵ある人びとの是認だけを価値ありと認め、彼らからの敬意をこよなく手に入れたいと思いこがれます。彼は、知恵ある人びとからすべて見通されていると感じ、自分の行きすぎた身のほど知らずをさげすまれるのではないかと疑って、しばしば、人もあろうにそんな人びとと敵対する・むごい非運に苦しみます。初めは猜疑心をもって隠然と、ついには公然と激烈に執念深く敵対するその相手こそ、疑わず安心して友情を享受していれば無上の幸福を頂戴していた人たちなのです。

52　わたしたちは、高慢ちきと見栄っぱりを疎んじるせいで、しばしば思わず、彼らが本来占める位置よりも高めというより低めに評価します。それなのに、わたしたちは、なにか具体的で面と向かう不謹慎によって挑発されないかぎり、あえて彼らに悪い待遇を与えることはまずしません。通常の場合、わたしたちは自分がくつろぐために、むしろ彼らの愚かさを黙認し、それとできるだけ折り合おうと努めます。

しかし、過小な自己評価をする人に対して、わたしたちは、大方の人びとを上回る鑑定眼と高潔無私を兼備しないかぎり、少なくとも彼が自分に与える不公正な待遇のすべてをほとんどかならず与え、それよりずっと多く与えることもよくあります。彼は、高慢ちきや見栄っぱりよりも不幸せな心持ちであるばかりか、他人からありとあらゆる悪しき待遇を受ける危険性が大いにあります。ほとんどどんな場合でも、どこか謙虚すぎる面があるよりは、すこし高慢すぎるほうが、まだしもです。当人にとっても公平な観察者にとっても、自己評価の感情は、およそ不足するよりも、いささか過剰であるほうが心地悪くないように思われます。

53　したがって、自己評価の感情の場合も、その他のあらゆる情動、情念、習慣の場合と同じく、公平な観察者にとってきわめて

心地よい水準は、当人自身にとっても同様にきわめて心地よく、また、それの過剰や不足が、公平な観察者の神経を逆なですることが少なければ少ないほど、それに比例して当人自身にもその過不足は心地悪くありません。

第Ⅵ部の結論

1　わたしたちは、自分の幸福が気がかりですから、予見注意力の美徳［目先が利いて注意深い資質］をもちなさいと勧告されるわけですし、他人の幸福が気がかりですから、正義と恵み深さの美徳をもちなさいと勧告されるわけです。正義は、他人の幸福を損なうことを差し止め、恵み深さは、他人の幸福を増進するように衝き動かします。

当初、これら三つの美徳は、他人の感情――他人が実際にいだく感情、他人が是非にもいだくにちがいない感情、他人がしかるべき条件のもとでいだくであろう感情――への配慮とは無関係であって、予見注意力は、私事にかまける心の動きにより、正義と恵み深さは、他人の幸せをねがう心の動きによって、勧告されます。

しかし、その後、他人の感情への配慮が、上の三つの美徳の実践を補強し、指揮しますが、だれひとり、生涯の全部あるいはその相当期間を通じて、予見注意力の道、正義の道、適切な恵み深さの道を、着実に整然と歩んだことはありません。なぜなら、人間のふるまいを指揮する主要な動機は、居ると推定されるあの公平な観察者――胸中のあの偉大な同行者、ふるまいを判定するあの偉大な裁判官・仲裁者――の感情への配慮ではなかったからです［cf. III. 1. 2］。

もし、わたしたちが昼間の活動中、公平な観察者の規定する準則をどこか踏みはずしたらどうなるでしょうか。もし質素倹約に努めなさいという準則に対して厳しすぎたり甘すぎたり、あるいは、労働にいそしみなさいという準則に対して厳しすぎたり甘すぎたりしたらどうでしょうか。もし情念に駆られるか、うっかりして、隣人の利益や幸福をどこか損なったらどうでしょうか。また、隣人の利益や幸福を増進することがはっきりしている適切な機会を見過ごしたらどうでしょうか。そんな場合、あの胸中の同行者は、その日も暮れてわたしたちを出頭させ、上記の不履行と違反についてことごとく問責し、すると、わたしたちは彼の叱責によって、自己の幸福に対する不見識・不注意、また、おそらくそれよりずっとひどい他人の幸福に対する無関心・不注意をかえ

りみて、しばしば内心赤面します。

2　しかしです。予見注意力、正義、恵み深さといった美徳は、様々な場面で二つの異なる原理［私事にかまける心の動きと、他人の幸福をねがう心の動き］によって、ほとんど同等の強さで勧告されますが、自制の諸徳は、ほとんどの場面において一つの原理――適切さの感覚、居ると推定されるあの公平な観察者の感情への配慮――によって主導的に、そしてほとんど全面的に勧告されます。

もしこの原理が束縛を課さなければ、どんな情念もほとんどの場面で、妙な言いかたですが、それ自身の欲求充足に向かってまっしぐらに突進するでしょう。怒気は、自身にやどる激情の教唆に従い、恐怖は、自身に逆巻く動揺の教唆に従うでしょう。禁じられた時や場所への配慮によって言いくるめられなければ、見栄は、どんなにやかましく不謹慎なひけらかしも差し控えず、淫蕩は、どんなにあけすけで、はしたなくみっともない耽溺も差し控えないでしょう。

他人の感情――他人が実際にいだく感情、他人が是非にもいだくにちがいない感情、他人がしかるべき条件のもとでいだくであろう感情――を尊重することこそ、上のすべての反抗的で騒々しい情念を大抵の場合に神妙にさせ、公平な観察者が入りこみ・共感できる程度の調子・気分にする、唯一の原理です。

3　たしかに、そんな情念は、不適切であるという感覚によって押しころされるより、むしろ、それに耽溺することから生ずる悪い帰結を見通し注意深く考慮することによって押しころされる場合もあります。

そんな場合、その情念は、押しころされはしますが、かならずしも鎮静化せず、むしろ、当初にもつ激烈さを温存して胸のうちに潜み、じっと機をうかがっていることが多いものです。怒気が恐怖によって押しころされる場合、その人は怒気をかならずしも捨てず、ただひたすらもっと安全な機会を待って成就させる魂胆なのです。

しかし、自分が受けた権利侵害の顚末をだれか別の人に語る場合、その人は、仲間のもっと抑制された感情に共感することで、自分の情念の激烈さが冷やされ、鎮まる感じをすぐに味わいますし、また、抑制されたその感情をすぐに汲みあげ、彼が権利侵害

を見た当初の・あくどく陰惨な視点からでなく、仲間が自然にそれをながめるときの・ずっと穏やかで公正な視点からながめるようになります。彼は、自分の怒気を押しころすだけでなく、多少ともそれを鎮静化させます。情念は、以前よりも実際に希薄になり、おそらく彼が最初にしようと思っていた血で血を洗う仕返しに駆りたてる力は弱まります。

4　適切さの感覚によって押しころされる情念は、この感覚によってどれも多少は抑制され・鎮静化します。しかし、もっぱら結果を見通し注意深く考慮することによって押しころされる情念は、上とは反対に、その抑圧のせいでしばしば燃えたぎり、ときには、（腹立たしい扱いを受けてからしばらく経ち、だれもそのことを考えていないときに）、理不尽に思いがけなく爆発し、十倍も激烈に荒れ狂います。

5　しかし、怒気も、ほかのあらゆる情念も、先を見通し注意深く結果を考慮することによってずいぶん適切に押しころされることは多いかもしれません。そんなしかたで情念を押しころすには、いささか男らしさと自制心をはたらかせることだって必要です。公平な観察者は、敬意をこめてそれをながめることがあるかもしれません。しかし、その場合の敬意は、この観察者が「庶民レベルの予見注意力が処理する問題にすぎない」と考える類のふるまいにふさわしい・冷ややかなものであって、愛情こまやかな賞賛の念ではけっしてありません。そんな賞賛の念が湧くには、公平な観察者に検査される怒気などの情念が、適切さの感覚によって抑制され・鎮静化して、観察者自身が即座に入りこんでゆける程度にならねばなりません。一方、情念が結果の考慮によって押しころされる場合、公平な観察者はしばしばある程度の適切さを識別するかもしれませんし、お望みなら、美徳を識別するといってもいいでしょう。しかし、それは、情念が適切な感覚によって押しころされる場合にいつも観察者が感じて我を忘れ賞賛する適切さ・美徳よりも、ずっと低級です。

6　予見注意力、正義、恵み深さの美徳には、きわめて心地よい結果を生み出す傾向しかありません。そんな結果に対する配慮から、これらの美徳をもちなさいと、当初に勧告されるのは、行為者であり、しからば、そのあとに勧告されるのは、公平な観察者です。

七五

わたしたちは、目先が利いて注意深い人の人柄を是認する場合、もの静かで慎重なその美徳に警護されて歩むあいだ彼が味わうにちがいない安心を感じ、妙に安らぎます。また、正義を重んずる人の人柄を是認する場合、他人に危害をおよぼしたり神経を逆なでしたりしないよう潔癖に心配する彼の態度から、近所づきあい、仲間づきあい、仕事づきあいをする皆が引き出す安心を感じ、やはり安らぎます。また、恵み深い人の人柄を是認する場合、彼のほどこす善行に浴する人たち皆の感謝の念に入りこんでゆき、彼らとともに、彼の功労をきわめて高いと感じます。

わたしたちが以上の美徳をすべて是認する場合、美徳が生む心地よい結果についての感覚、つまり、美徳がそれを実行する当人やほかのだれかにとって役立つという感覚は、美徳の適切さについての感覚と結びつき、美徳を是認する感情の相当部分をつねに織りなし、その大半を占めることもよくあります。

7　しかし、わたしたちが自制の諸徳を是認する場合、その美徳から生ずる結果に安らぐことは、是認感情の成立要件でないことがときにありますし、大抵は、そのわずかな部分を占めるにすぎません。自制の美徳から生ずる結果は、心地よいことも、心地悪いこともあり、心地よい結果であるときのほうが、わたしたちの是認感情が強いのは確かですけれども、心地悪い結果のときでも、是認感情がすっかり台無しにされることはけっしてありません。

無類の英雄の武勇は、正義と不正義のどちらの大義にでも用いられ、正義が大義であるときのほうがはるかに好まれ、賞賛されるのは確かですけれども、不正義が大義のときでも、相変わらず偉大で仰ぎ見られる資質として映ります。武勇、その他すべての自制の美徳において、華々しい目もくらむ資質であるといつも思われるのは、それを発揮する態度が立派でひるまないことであり、そして、そんなふうに自制心を発揮し、またそうし続けるためになくてはならない・適切さについての強い感覚です。こうして生じる結果は、衆目を集めずにはいないのに、その良し悪しが問われることはめったにありません。

（やまもと・よういち　法学部教授）